

遠い昔々のお話です。遙か昔、アトラーズと呼ばれたこの世界には多くの神々と精霊達が住んでいました。そこはあまりに平和な世界でした。あまりの平穏さに退屈した神々は精霊たちに命じ、このアトラーズの大地に山を作り川を作り、そしてそれらを彩る植物を作らせました。しかし、植物は動きません。植物の美しさに飽きた神々は自らの分身となる動く生物たちを作り出しました。エルフ、ドワーフ、オーガ、ネレイド、ドラゴン、数々の種族を生み出しましたが、やはりそれらも退屈でした。そして神々は最後に人間を生み出し、そうして神々は違う世界に旅立ちました。

神々が去ったこのアトラーズの世界で精霊たちの加護を受け、それぞれの種族は順調に繁栄していきましました。いくつかの種族は精霊の力で滅びましたが、やはり世界は平和で平穏でそして退屈でした。

しかし、ある時一人の男が人間の中に生まれます。人間でありながら精霊をも凌駕する力を持ったその子は、精霊達から恐れられました。預言者クロートーは言いました。「精霊の加護から外れ、世界の調和から外れたこの子は、やがてこのアトラーズの運命を変える英雄となるだろう」。預言どおりその子、モートはこのアトラーズの運命を変えることになりました。長じて彼は魔王となり、自らの魔力を使って世にも恐ろしい姿をした異形の魔物を世界に解き

放ったのです。アトラースに住む種族達はそれぞれに反抗しましたが、魔王モートの強大な魔力と大地を覆い尽くすほどの数の魔物達の前にはなすすべはありません。古き精霊達でさえ魔王モートにはかなわず、やがてその力を失っていききました。精霊たちの加護がなくなったこのアトラースの世界では、大地は乾き、草木は枯れ、海は荒れ狂い、太陽も黒い雲で覆われました。こうしてアトラースの世界は長く苦しい暗黒の時代に入りました。

数百年後、ある時一人の男の子が人間の中に生まれました。人間でありながら精霊達を見て、話し、触れることのできた彼は、精霊たちの加護を受けました。預言者クロートーは言いました。

「精霊の加護を受け、世界の調和の中に生まれたこの子は、やがてアトラースの運命を変える英雄になるだろう」。預言通りその子、アトロ・アヴァロンはやがてこのアトラースの運命を変えることになりました。アトロは長い冒険の末、種族を越えた多くの仲間を得て、このアトラースの世界に住む多くの種族を一つにまとめ、やがて魔王モートの城に攻め入りました。激しい戦いの末、ついにアトロの光輝く正義の剣が魔王モートを討ちました。こうして魔王モートは死にました。アトロはこのアトラースのすべての種族から敬われ、この世界ただ一つにして最も榮譽ある称号、勇者と称えられました。そうして勇者アトロは人間達の王となり、このレオデグラランスの国を建国したのです。

プロローグ

魔王モートの死から数百年、魔王軍の残党といえる魔物達は狩り出され、野生の魔物達は徐々に姿を消してきました。平和なアトラスの大地で人間達は栄えました。レオデグランスからはいくつかの国が分裂し、さらに多くの国ができました。それらの国々の間で小競り合いの戦争は幾つかありましたが所詮人間達の中の戦い。エルフは緑の森の中で、ドワーフは暗い洞窟の奥で、ドラゴン達は深い峡谷で、そのほかの種族もそれぞれ静かに暮らしていました。しかし、変化は突然訪れました。近年、どこからともなく魔物達が現れ、村々を襲い始めたのです。自然も変化していきました。エルフ達は枯れていく木々を見て森の精霊が怯えていると言い、ドワーフは地震の続く大地が怒りに満ちていると言いました。

世界に不吉な噂が流れます。「魔王モートは生きていて、傷ついた肉体と衰えた魔力もすでに回復しつつある」。

勇者アトロの末裔であり、人間達の国の中で最も大きな国であるレオデグランス国王、アヴァロン王はこの噂を重くみて、人間達の国々の国王達を集め、会議を開きました。しかしここ数百年、領土問題で互いに争い、また魔王軍の驚異など感じたこともない人間の王達はこの噂を真面目に取り合おうとしません。業を煮やしたアヴァロン王は単独で軍勢を率い、廃墟と

なつたかつての魔王の居城に向かいました。そこにはかつて魔王の十三人の腹心達『十三の使徒』と数え切れないほどの魔物がいました。アヴァロン王は果敢に戦いましたが、アヴァロン王の軍勢は全滅。アヴァロン王は何とか逃げ延びましたが、重傷を負ってしまいました。二度と戦場に立てそうにありません。

魔王軍復活の知らせは世界中に伝わりました。急遽、種族を越えた世界会議が開かれました。『ここは慎重に様子を見るべきだ』とか、『何も魔王が復活したわけではない、それほど大騒ぎすることもない』とか、『いや、やはり魔王は復活しているのだ。魔王の復活が完全になる前にいまずぐ攻め入った方がいい』とか、いろいろ意見は出ましたが、ここでも各国足並みそろいません。そういうしている間に、世界の三分の一ほどは魔王軍に侵略されてしまいました。

あまりの各国の行動の遅さにまたも業を煮やしたアヴァロン王はある苦肉の策を考え出しました。翌日、種族を越えた世界中の国々の町々にビラが配られます。

『勇者募集。魔王を倒したものはかつての勇者の称号と我が娘との結婚の権利を与え、我が国の王位継承者とする。また褒美として望むものは何でも与える。我こそはとおもわんものは一ヶ月後、レオデグランス国首都キャメロンに集え』。

当日、首都キャメロンには様々の種族の数百人、いやそれ以上の戦士達が集まりました。その様子を密かに眺めていた予言者クロートーは言いました。「この中から魔王モート、勇者アトクをも越える、新たな第三の英雄が現れるだろう。アトラーズの運命はここから大きく変わ

る」そう言ってクロートーは立ち去りました。

伝説はここから始まります……。

首都キャメロンはかつてないほどの賑わいを見せていた。勇者募集の告知を見た世界中の様々な種族の様々な戦士たちが集まり、それを相手にする商人達も数多く集まってきたのだった。キャメロンでは宿屋の数が足らず戦士達の間でいさかいまで起こる始末。空には花火が打ちあがり、戦士達を歓迎するパレードまで行われた。まるでお祭りだった。

アヴァロン王とその娘エレイン・アヴァロンは宮殿から数百人という戦士達の集まった広場を見下ろしていた。

「なかなか精悍な眺めだな。世界中から素晴らしい戦士達が集まって来ている。見てみなさい、エレイン。あの三メートルは越えようかという巨体、オーガ族の英雄ガヘリスだ。なんでも彼は素手で熊を殺してしまうという話だ。それに広場にひときわ輝くあの銀の弓を背負った男、エルフーの弓の名手とされるエリックだ。百メートル先の木から落ちていく木の葉も射抜いてしまうとか。おお、あそこに見えるウサギ耳をした者達は、森の妖精といわれる幻の希少種族ラビトニアンか。儂も見るのは初めてだ。彼らは力は弱いが皆すぐれた魔法使いということだ。もちろん人間の英雄達も多数参加しておるようだぞ。あの白馬に跨り、白銀の鎧をまとった男は白銀の騎士エクターだ。数々の戦場を渡り歩き、また各国の王の前で見せる騎馬槍の御前試

合でも負けたことがないらしい。それにあのハンサムな男は北の勇者と呼ばれるグリフレットだ。彼は今までに数え切れないくらいの魔物を退治してきたとか。うん、うん。これだけの英雄達が集まれば魔王軍をいえどもおそれるにたらんかもしれん」

そうやってアヴァロン王は満足げにうなずいた。

「でも、お父様。なんだか素性の怪しそうなものもずいぶん混ざっているようですよ」

「それはそうだろうな。金に目がくらんでやってきたごろつきどももかなりいるだろう」

「だいたいお父様、勝手な約束はしないでいただきたいわ。魔王モートを倒した者を私の婚約者になさるだなんて。エルフ族の方ぐらいならともかく、オーガ族の方やあんなごろつき達かもし魔王を倒してしまったらどうなさるの。私、三メートルもある夫なんていやですわ」

そうやってエレインはプイツとそっぽを向いた。

「そう言うなエレイン。これも世界の平和のためだと思って我慢してくれ。もし魔王モートが本当に生きていて、その力が完全に復活しようものなら、世界は再び暗黒の闇に包まれる。多くの罪のない人が無惨に殺されてしまうのだ。それでなくても私は見たのだ。あの廃墟となった魔王の居城に数万もの魔物達が集結しているのを。そしてそれを指揮していたあの男……今思い出してもぞっとする……私も伝説に伝わる話しか聞いていないが、あの男こそ十三使徒の筆頭にして副王と恐れられるモードレッドに間違いない。まさかあんな男が生きていたとは……伝説の中の人物とばかり思っていたのに。この分では他の十三使徒も生き残っている可能性は高い。もし十三使徒が全員世界のどこかで生き残っていたとしたら……魔王復活に匹敵する

驚異だ……」

そう言つてアヴァロン王は青い顔をして震えた。

「何を弱気なことを。それでもお父様は勇者アトロの血を引く者ですか。その腰についてる正義の剣、エクスカリバーが泣きますよ」

「そうは言つてもな、エレイン。十三使徒……彼らの力は想像を絶しているのだ。私の率いた王国の精銳騎士団三千騎がその時、モードレッドのたった一つの魔法でほとんど壊滅してしまつた。そして、その後の魔物達の怒濤のような突撃……命からがら逃げて、生きてこの国に帰れた者は百に満たなかつた。私も生きて帰れたのが奇跡だ。これも創造主イーリアスの加護のおかげだろう」

そう言つてアヴァロン王は首に下げた紋章に口づけした。

「お父様、そうやつて神頼みするのはおやめなさい。人は自らの力で自分の運命を切り開いていくべきです。私も勇者アトロの血を引く者です。もし魔王モートやモードレッドごときがこの国に攻め入ってきたら、私がこの剣で討ち取つて差し上げますわ」

エレインはアヴァロン王の腰の鞘から聖剣エクスカリバーを引き抜いた。かつて勇者アトロが魔王モートを倒したとされる剣だ。エレインがエクスカリバーを太陽にかざす。刀身がまばゆく光り輝き、あたりを神々しい白い光で満たした。

「こら、やめんか。おまえが剣を持つとあぶなかくていかん」

アヴァロン王はエレインから剣を取り上げ、腰の鞘に収めた。

「まったく……そんなおてんばだから嫁のもらい手がないのだ。おまえが男だったらと儂も時々思うよ。間違いなく英雄になっていただろうに……全くその負けん気の強さは誰に似たのか……」

「勇者アトロクでしょうよ」

エレインはそう言って、悠然と奥へと下がっていった。

アヴァロン国王は式台に立ち、広場に並んだ数百の戦士達に向かって言った。

「栄光を求める戦士達よ、死をも恐れず正義に向かって進む英雄達よ。よくぞこのキャメロンに集まってくれた。君たちをこのキャメロンに迎えられたことを光榮に思う。君達にはまずこれから数人から十数人のパーティを組んでもらい、それから魔王討伐に向かってもらう。もちろん、誰ともパーティを組まず一人で向かうというならそれもかまわない。ここでパーティに分かれて別々に魔王城まで向かってもらうのは、途中万が一魔王軍の攻撃に合った場合、一度に全滅してしまうのを防ぐためだ。魔王モートを討ち取ったものには約束通り、種族を問わずその者を我が娘の婿とし、このレオデグランスの王位継承者とする。もしも魔王を討ち取った者が女性であった場合でもこの王位継承権は与える。そして、この国に伝わる世界で唯一にして最高の栄誉、勇者の称号を与える。また、十三の使徒を討ち取った者にも多額の報奨金を出すことを約束する。今我が娘エレインは残念ながらここにはいないが、未来の自分の夫となる

勇敢なる勇者の出現を期待している」

エレインはこの開会式には出席していなかった。どうにも彼女にはこの勇者募集の催しは馬鹿らしく思えて仕方ないようだ。

アヴァロン王は続ける。

「かつて勇者アトロはこの町で生まれ、ここから魔王討伐の冒険へと旅だった。諸君らも今勇者アトロと同じ地に立っている。願わくば未来の勇者達の長き旅路に、創造主イーリアスと精霊、そして勇者アトロの加護があらんことを。では健闘を祈る」

ファンファーレが鳴り響き、盛大な拍手をもって開会式は幕を閉じた。

第一章

1

「……人が多いな」

閉会と共に開会式会場から出てきた男はそう呟くと、長い自分の黒髪をかき上げた。

男は腰に二mにもなろうかという長剣を下げているのがわかる他は、首から足まですっぽりと覆った旅人のマントによってその姿は隠されていた。

周りでは、戦士、魔法使い、弓使いなど、大勢の人が互いに話し合い、和解、喧騒などを繰り広げている。

「……」

あたりを少し見回した男は、騒がしいのは嫌いだと言うかのごとく、歩を進め、開会式の会場前の広場を後にした。

それからしばらく町を当てもなく彷徨っていた男は、飯屋兼宿屋を見つけ、腹が減っていることに気が付いたようにすうっと入っていった。

「いらっしやい、泊まりかい？飯かい？」

この主人なのであろう、元気のいいオヤジが声を掛けてくる。

「……飯をくれ」

「あいよ」

愛想の悪い男の返事に気を悪くした雰囲気もなく、機嫌良さそうに返答するオヤジ。

「なあ兄さん、あんたも勇者志望かい？」

「……まあそうだ」

「こちらら、あの開会式のおかげで商売繁盛、ある意味魔王様さまだね」

商売人らしい笑いを浮かべ、王に聞かれれば打ち首になるやもしれない危ないことをいい、オヤジは奥へ引いていった。

「……」

ここの飯は美味だったらしく、男はあっさりと平らげ、余韻を楽しんでいたときだった。

「おにいちゃん、お名前は？僕はコーリス」

足下から声が出た。

男が下を見ると、三歳頃だろうか、それくらいの幼い少年が立っていた。

「お名前は？」

何も知らないような無垢な目でこちらを見ている。

「……」

男は苦手そうな顔をするが

「お名前は？」

つとその目を向けられ続け、ついに落ちた。

「……アヴァウッド、アヴァウッド・キャメロンだ」

「アヴァ……？」

どうやらコーリスは覚えきれなかったらしい

「……アッドでいい」

男、アランはそういうと注がれた水を飲み、席を立った。

逃げ出したと言ってもいい。

「アッドくまたね」

アッドの背中に手を振りながら声を投げかけるコーリス。

振り返らずに、手だけ軽く上げてアッドは飯屋を後にした。

「……」

どうするか、と言った面持ちで、アッドは町を彷徨っていた。

しかしながら、開会式後、すごい数の人、人、人で溢れかえった町中を彷徨い歩く気はしなかったようだ。アッドはそうそうに宿を取り、部屋で眠ることにした。

「……」

眠りに就いたアッド、そのアッドの意識にいつも投げかけられる言葉があった。

『殺せ、殺せ、あいつらを、俺を虐げたやつらを』

そしてもう一つ。

『モード、必ず復讐してやる』

アッドが眠りに就くと必ずこの二つの意識が呼び起こされる。

アッドが『アッド』として生を持ったその日から。

その意識から開放され、目覚めるとき、それは毎朝、アッドは決意を新たにするので。

モードに復讐する。

今自分に残された、昔の自分。

まだ記憶を失う前の自分の忘れ物。

二つの意思。

その一つの為に、アッドはこの勇者募集という陳腐な催しに乗ったのだ。

魔王モードへの復讐。

彼は、彼の内にある魔王への激しい憎悪の為に、勇者への冒険を始めることにしたのだった。

満月の光に一人の男の姿が浮かび上がる。男は荒野を凄まじい速さで走っていた。服装は黒い皮のジャケットに黒いズボン。旅人の服装ではない。それに腰には何の武器も帯ていないようだ。魔物が出て村を襲うという近頃、夜中に武器を持たずにこんな荒野を走っているとは、普通に考えれば正気の沙汰ではない。しかし、月の光を受けて金色に輝く彼の目が、何者も近寄りがたい危険な雰囲気を出していた。

「ちっ。まったくしっこいやつらだ」

夜通し、ロア・ソアは走っていた。時々後ろを振り返る。さすがにもう振り切っただろうか。背後には何もいない。ロアは足を止めてゆっくりと辺りを見回す。辺りはうつつすらと明るくなり始めていた。どうやらもうキャメロンの城下近くのようなようだ。あたりにはまばらに民家も見え、遠くにはアトラーズの世界最大の都市の一つといわれる城塞都市キャメロンが見えている。

「あー、疲れた。教会の連中、ほんとにみさかいがねえな。俺がヴァンパイアだっただけで襲ってくるんだからな。もう少して死ぬとこだったぜ」

ロアは近くの石に腰を下ろすと、たばこを取り出して火をつけた。

「あんまり人の多い町には行きたくないだけだな。これだけでかい町なら、教会だってたくさんあるだろうし……まあ、背に腹は代えられねえ、行くしかないか」

そう言うと、ロアは立ち上がり、煙草を吹かしながらキャメロンの町に歩いていった。

「あー、さすがにでっかい町だな。それに人もうじゃうじゃいる。こりや、俺じゃなくても迷うぜ」

ロアは観光客のように辺りを見回しながら、キャメロンの町並みを歩いていた。道に迷ったのだから、何とも同じところをぐるぐる歩いている。

「えーっと、勇者募集の開会式はあっちかな。ああ、もうぜんぜん道わかんねえよ。これじゃあ開会式はじまっちゃうぜ。しゃあない、誰かに聞くか」

ロアは辺りを見回し、近くに露店を開いてあった中年の女性に道を尋ねた。

「ああ、ここだな」

ロアはやっと開会式場を見つけた。受付の方にやってくる。受付の前の長い行列を並んでようやくロアの番がきた。

「えーっと、勇者募集の張り紙みてきたんだけど」

「参加希望の方ですね。一応この用紙に必要事項記入してください」

受付の兵士から用紙を渡されたロアはその場で記入を始めた。

「りょーかい。えーっと、名前はロア・ソアだろ。歳？歳ははつきり覚えてないな。たぶん六

十くらいだと思うんだけど……まあ、適当でいいか。種族は元人間のヴァンパイアと」

「ヴァンパイア？ちよつと冗談はよしてくださいよ」

受付の兵士が笑いながら青い顔をして言った。

「冗談じゃないよ。ほら」

ロアは口を開けて兵士に見せる。そこには明らかに人より長い犬歯があった。

「げっ……」

辺りにいた兵士が一斉に色めき立つ。中には剣を抜くものさえあった。

「おいおい、ちよつと待ってくれよ。ほら」

そう言つてロアはズボンのポケットを探り始めた。中からしわくちやのピラを取り出す。ピラを広げてそれを指さした。

「ほら、ここの参加資格のところに種族は問わないって書いてあるじゃないか」

「い、いや、しかしですね……」

受付の兵士が戸惑っていると、列の後ろから銀の弓を背負ったエルフが二人の元にやってきた。

「おい、後ろがつかえてるんだ。早くしてくれないか。うん……?」

急にエルフがロアの顔をじつと見つめる。

「おまえ人の姿をしているが人間じゃないな。気配でわかる。ヴァンパイアだな」

「ああ、確かにそうだけど。俺がヴァンパイアだったらなんだってんだ」

真剣な口調のエルフとはうらはらに、ロアは軽い口調で答えた。

「邪悪なヴァンパイアがこんなところで何をしているのかと聞いているんだ」

「この勇者募集つてのに参加しようと思つてな。何か問題でもあるのか」

「おおありだ。存在だけでも汚らわしいヴァンパイアが、真つ昼間からこんな大都市に入つてくるなど正気の沙汰とも思えん。今すぐこの町から立ちされ。でなければこの銀の弓がお前を貫くぞ」

エルフが背中中の銀の弓を外し、矢に手をかける。

「はっ、貧弱なエルフが言つてくれるね。やれるものならやってみな。その大層な矢を弓につがえる前に俺がお前の首へし折つてやるぜ」

ロアがニヤツと笑つてそう言つた。

ロアとエルフが睨み合う。辺りに緊迫感が漂つた。周りの兵士や参加者達も息を呑んで二人を見つめる。

「おやめなさい、二人とも大人げない」

そんな静寂を破つたのは一人の少女の声だった。少女の横には鎧を着込んだ貴族風の長髪男が静かに立っている。

つかつかとその気の強そうな少女が歩いてきた。

「エ、エレイン様、なぜこんなところに」

受付の兵士が驚いた声を上げる。

「話は聞いていました。そのヴァンパイアの方を通してあげなさい」

「し、しかしですね。それは私の一存では……国王陛下に報告しないと……もし、万が一問題でも起こったら……」

「ぐちぐちうるさいですね。私が責任を持って許可します。確かに参加資格には種族を問わないと書いてありますから。それとも私の命令は聞けないとでも言うのですか」

「い、いえ。わかりました。では、ロア・ソアさん。どうぞあちらへ」

受付兵士が開会式場入り口の方を指す。

「おう、悪いね」

ロアが明るく言う。そのロアを見たエルフが言った。

「命拾いしたな。私の名前はエリック。今度会ったときは容赦なく射殺させてもらう。覚悟しておくんだな」

「お前がな」

ロアはエリックにそう言うと、エレインの方に向き直った。

「誰かは知らないがそこのお嬢ちゃんサンキュー」

「なっ……お嬢ちゃんですって」

怒りに震えるエレインをよそにロアが入り口の方に向かおうとする。しかし、その喉元に剣が突きつけられた。

「おい、貴様。口の利き方に気をつけろ」

いつのまにロアの横に来たのか、それまでエレインの後ろに立っていた貴族風の男がロアに剣を突きつけたまま言った。

「へえ、やるじゃん。俺からこんな簡単に一本とるなんて」

ロアが自分の喉元に突きつけられた剣の刃を無造作に素手で掴んで言う。

「こらっ、ライオネル。やめなさい」

エレインが怒鳴る。

「失礼しました」

ライオネルと呼ばれた男はあっさり剣を鞘に収め、再びエレインの後ろに下がった。

「ほら、そのヴァンパイアの方も早く行きなさい。あなたがいると問題ばかり起こって困ります」

「はいはい」

ロアはエレインに無造作に手を振って、開会式入り口の方へ消えていった。

「まったく、ライオネル。あなたも大人げないですよ。あんな簡単に剣を抜くとは。もし、あそこで決闘でも起こったらどうなるのです」

城の奥へと戻ったエレインが自分の護衛隊長であるライオネルに言った。

「申し訳ありません。しかし、エレイン様もエレイン様です。勇者申し込みに来た者達をもつ

と間近で見たいなんて言い出すんですから。彼らの中にはあのヴァンパイアのようなろくでもないごろつきも混じってます。万が一怪我でもなさったらどうするつもりなんですか。もっとご自分の立場をご理解ください」

「あなたが側にいれば万が一のことなんて起こりようないでしょう。しかし、今日、彼らを実際に見てみて本当に失望しました。あの軽いヴァンパイアといい、そのヴァンパイアと問題を起こすエルフといい、まったく協調性というものが感じられません。互いに協力することなしに魔王軍に勝てると思っているのでしょうか。これでは魔王軍の城に到達する前に、お互いのパーティー同士で殺し合いでも始めそうです。まったく心配ですわ」

エレインはそう言ったため息をついた。

「ふわっ、ああ寝む。いつもなら眠ってる時間だからな」

大きなあくびをして、もうすぐ正午だというのに不健康なセリフを吐くロア。まあ、ヴァンパイアにとってはそれが健康的なんだろうが。

ロアにとって退屈きわまりない開会式が終わり、あてもないロアは町中をうろついていた。

「さーて、これからどうすっかな。パーティーの仲間探すなんてめんどくさいし、そもそも俺とパーティー組みたいなんて奇特な奴はいないだろ。朝のあの銀弓エルフに出会っても面倒だしな。ここはとりあえず飯でも喰うか。そうと決まれば、うまい飯屋はどこかな」

そう言ってまたあてもなくロアはうまい飯屋を探し始めた。

時は遡り、四日前……とある町の酒場にて。

「僕とはもうパーティが組めないだって!?」

黒い三角帽に黒いローブ。典型的な魔法使いスタイルの青年が突然席を立ち声を荒げた。気まずそうな顔をする同じテーブルの四人組。突然の怒声に酒場は一瞬静まり返ったが、よくあ
るパーティ間の揉め事だと分かるはずにその喧騒を取り戻した。

「お、怒らないでくれよお、ネッコ。まず落ち着い……」

出っ歯のエルフ族の盗賊が青年をなだめようとするが、ネッコは出っ歯のエルフを睨みつけ、
黙らせた。

「……これは、みんなで決めたことだから……」

図体ばかりがでかく、気弱そうな戦士の男が呟くように言った。その言葉に、驚くネッコ。

「みんなで決めた……? 一体なにが不満なんだ? 僕が力不足だったようには思えないけど
ね!」

ネッコの怒鳴り声に、四人はしよんぼりと肩を落として俯いていた。やがて気まずそうな雰

困気に耐えかねたのか、クレリックの男が申し訳無さそうに口を開いた。

「あのさ、ネッコ。僕達のパーティーと君とは、どうも目指すものが違うようなんだ」

ネッコは、自分がこのパーティーに今一つ馴染んでいないことを知っていた。それを知りながらも、今までこのパーティーでやっていけたのはこのクレリックの男がいたからだだった。男の名前はリユーイ。気さくな性格で誰とでも分け隔てなく振舞い、クレリックとしての力も申し分無いものを持っている優秀な男だった。そして、リーダーとしての資質を持ちながらもクレリックという地味で目立たないポジションからパーティーを支える彼を、ネッコはつねに尊敬していたし、また良き友人だと信じていた。

それだけに、彼の言葉は誰よりもネッコの心に響いたに違いない。彼は先ほどまでの劍幕とは打って変わって、明らかに困惑の表情を浮かべていた。

「リユーイ。この件についてはお前も賛成なのか……？」

「……」

リユーイは俯いたまま何も言わない。しかし、その沈黙はネッコにとって何よりも残酷な仕打ちであった。

「……じゃあお前達の目指すものって何なんだ？僕のお陰で、お前達だけでは到底倒せないモンスターを何匹も倒してきたじゃないか？それが不満だっていうのか？」

「……ネッコ、君はさあ、確かにすごい魔力を持つてるし、僕たちは何度も君に助けられたけどさあ……でも、そもそもそんな凶悪なモンスターのいる危険な場所へ行こうと言い出すのは、

ネッコ、いつも君じゃあないか」

と、出っ歯のエルフ。

「俺たちはそんな危険な狩りをするつもりないから……」

でかい戦士が続いて言った。

「そもそも……お前の魔法は強力だけどその分消費も激しいし、強力なモンスターを数匹狩ったぐらいじゃ、お前に合わせた宿代やアイテム代の方がはるかに高くつくってもんだ」

と、同じパーティの商人の男。ネッコは表情を硬くしたまま、黙って聞いている。商人の男は、そろばんを指で弄りながら言葉が続けた。

「要するに、俺たちはこれで生計立ててんだ。もっとコストパフォーマンスの優れた魔法使いが欲しいんだよ。強力な大魔法を操る大魔法使いさまになりたいなら結構、そりやお前の勝手だけだよ。ただ、俺たちとは合わないんだ。他当たってくんない！」

「よさないか、アコギ」

リユーイが商人の男をたしなめるように言った。しかし、アコギはネッコが大人しくしているのを見て取ると、調子に乗って言葉を荒げた。

「ふん。俺はなりユーイ、こいつのために言ってるんだぜ。人間にや勝てるモンスターと勝てないモンスターがいるんだ。デーモンだかドラゴンだか、そんなヤバイ相手は上級パーティに任せてさ、俺たちみたいな三流は三流モンスターを狩ってりゃいいんだよ。身の程を知れってんだ！」

突然、ネッコはテーブルに並んだコップを弾き飛ばしながら身を乗り出し、アコギの胸倉を掴んだ。先ほどの偉そうな態度はどこに消えたのか、突然消極的な顔になるアコギ。さっきまで大人しかったネッコの剣幕に、周りで見ている他の三人、いや、酒場にいる他の客までもが思わず息を飲んだ。

「……この僕が三流？この僕に三流モンスターを狩れだって……？」

やれやれ！ 殴っちまえ！ などと好き勝手に煽り始める野次馬達。

「ほ、本当のこと言っただけにがいけないんだよ。ったく……何様のつもりなんだか」

「貴様っ……！」

「よすんだ、ネッコ！」

リユーイが止めに入るとネッコは手を離し、それと同時にアコギは席を立ち、なにか捨て台詞のようなものを吐きながら、逃げるように酒場から出て行った。熱狂していた観客もつまらなくさそうに自分たちの会話に戻っていく。

「……」

「……」

リユーイとネッコがにらみ合うのを、ハラハラとした目で見つめる出っ歯エルフとでかい戦士。

「……ネッコ、君の資質が本物なのは、僕にはわかっている」

「別れ際につまらないおべっか使うのはよして欲しいな」

「おべっかなんかじゃ……」

「ふん、どうだか！ ……リユイー、僕はね、お前が上っ面ばかり愛想の良い人間だなんて思いたくなかったよ。他の連中なんかどうでもよかったけど、まさかお前にまで疎まれていたなんてね。ちっとも知らなかった」

「誤解だネツコ！ 僕は……」

「……っ」

「ネツコ……」

ネツコの冷たい目を見て、リユイーはもはやなにを言っても無駄だと言う事を悟った。それが、ネツコの前パーティー最後の会話だった……。

ネツコはそれから、新たなパーティーメンバーを探しに首都キャメロンへと向かった。しかし彼は、キャメロンに到着してからも自らメンバー募集をかけるようなことはせず、かれこれ数日をただただ無為に過ごしていた。

（はあ……僕はまた、なんであんなことを言ったんだか……）

公園の木の下でぼんやりとしながら、ネツコは思った。彼はリユイーが自分を疎んじていたなどとは、微塵も思っていなかった。パーティーの存続のために、あえて自分という相容れないタイプの魔法使いを切らざるを得なかったリユイーの気持ちは痛いほど分かっていたはずだった。

(一時の感情に任せて思っても無いことをすぐに口に出す。僕の悪い癖だ)

しかし、アコギのことを思い出すと、その反省心もろうそくの火のように頼りなく消え去った。

(僕が三流魔法使い？身の程を知れだって……!?)

ネッコ・マズルカ・ヴァンシュタイン。彼は、偉大なる大魔法使いルドヴィヒ・ポルカ・

ヴァンシュタインの孫であった。しかし、彼の異常とも言える高邁な自尊心は決してその偉大なる祖父の威光を借りたものではなく、純粹に自分の魔法使いとしての才能を信じているためであった。彼は祖父のことを尊敬こそすれど、その名前を他人に口にするようなマネは決してしなかった。あのルドヴィヒの孫……ただそれだけで周りから不当に高い評価を得て、魔法使いとしてダメになるのを彼自身が恐れていたからである。

また、ネッコはリジョという冴えない宮廷魔法使いの父親を持つ。へこへこと頭を下げながら貴族に仕えていた父を幼いころから眺めて育った彼は、自分をここまで育ててくれた感謝の情とは別に「こうはなりたくない」という気持ちの心のかきかきももっていたのかもしれない。そんなネッコにとって、三流という言葉が許せないものだったのも無理はなかった。

ネッコは自分の右手を、ツメが食い込むほどに握り締めた。

(今に見てろよ。僕は……誰にも負けない大魔法使いになってやるんだ。そうさ！ 勇者アトロと共に魔王と戦った、あの伝説の賢者サンダルクのように！)

その時、町の大通りに大勢の人々が通いだしたのをネッコは見て取った。

(ん……？　　そういえば今日は、例の勇者募集の……よし)

ネッコは立ち上がり、尻についた雑草を払って、大通りの人々とは逆の方向……勇者募集の会場へと歩き始めた。

「さあ、これでいいですわね」

そう言いながら、女性が老人の手の甲からそっと手を引いた。

「おお、さすがはメルフィナ様じゃ。傷があつという間に癒えてしもうたわい」

老人は満面の笑みで言った。メルフィナを呼ばれた女性は、黙って微笑み、その老人を見ていた。

「しかしあれじゃのう、最近では野生の魔物も増えてきて、隣町に行くのも命懸けになってきたわい」

その様子を見ていたもう一人の老人が、そう呟く。

「ここは大丈夫じゃろうけど、他の街は大変みたいじゃよ。なにせ、この世の中にまだ人間同士の戦争を続けておるんじやから……」

「ここは世界のイーリアス教が誇る神聖騎士団がおるからのう。魔物もそう易々と手は出せまいて」

イーリアスは世界各国に広がる、この世界でもっとも大きい宗教の名である。そのイーリアスが本拠を置くのが、この街ラヴィーンであった。

そんな老人達がたわいもない話をしているところに、一人の騎士が近づいてくる。その騎士は、メルフィナの前で歩みを止めた。

「メルフィナ・ルーベルドラクロア。大司教様が貴公にお話があるそうだ。教会へとお戻りいだだきたい」

「……どういった御用件でしょうか？」

「貴公に質問の権利はない。教会へとお戻り願う」

「……わかりました」

メルフィナはしばらくその騎士を睨めつけ、その場を後にした。

「メルフィナ・ルーベルドラクロア、入ります」

そう行って、メルフィナは部屋の中へと入り、ドアを閉める。そこには歳のいった男性が一人、椅子に座り窓の外を眺めていた。

「来たか。まあそこに掛けなさい」

そう言って、老人はメルフィナの方へと向き直る。メルフィナは適当な椅子を選んで、そこへ腰を掛けた。

「レオデグランスの勇者募集の話を知っておるか？」

「はい、街の人から聞いております」

「どう思うかね？」

「馬鹿な話です。富や名声などが目当てで集まったごろつき等に、魔王が討伐できましようか？」

メルフィナは顔を強張らせてそう言い放った。

「わからんぞ？軍に入ってなくても強い者はおる。今回のこれは、そういった『掘り出し者』が目的だからのう……」

「理解しかねます」

「面白くない奴じやのう」

老人は薄ら笑みを浮かべながらそう言った。

「それで大司教様、私にどう言った御用件でしょうか？まさか、そんな話をするのに、わざわざ神聖騎士をよこしたわけではありませんでしょうか？」

「まあ、単刀直入に言おう。お主にキャメロンへ出向いてもらい、その勇者募集に応募して欲しいのじゃ」

「……それは何故でしょう？」

そう聞いたにもかかわらず、メルフィナは何があってもそんな要求は断る気でした。勇者など興味がないのはもちろんの事、今は戦いの場に身を置く身分ではないと言う事を肝に免じていたからである。

「正直、このままでは魔王を抑える事は不可能じゃろうて……。だから、お主の様な力のある者が必要なのじゃよ。あの一族の生き残りのお主の力がな……」

大司教のその言葉に、表情を変え、黙り込むメルフィナ。

「お主の気持ちもわかる。だが、お主の一族とて、魔王に全滅まで追いやられたんじやろうて。これは良い機会かもしれんぞ？」

「復讐……と、言う事でしょうか？」

「司祭メルフィナ、そのような言葉を吐く場ではないぞ？」

「……申し訳ございません」

「冗談じゃ」

フォフォフォと笑いながら大司教は言った。

「しかし、これはイーリアス大司教からの直々の命だ。行ってもらわねば困るのじゃよ」

先ほどとは打って変わった真剣な表情で、大司教はメルフィナに言った。それは、命令を破った後、どうなるかわかっているであろうと言う意味も込められていた。

「わかりました……」

メルフィナはその一言だけを残し、大司教のいる部屋を後にした。

翌日、身支度を終えラヴィーンを後にしたメルフィナは、その日の午後レオデグランスの首都、キャメロンへと辿り着いた。キャメロンは、もともと人の多い都市ではあるけれど、勇者募集のせいかその人口は数倍にもなっているように見える。しかし、そのほとんどは武器を持ち、身に鎧を纏い、あるいは黒い全身ローブを着込んでいるものがほとんどであった。

(なるほど、すごい人ですわね……しかし、これではイーリアスの神聖騎士にすら勝負にならないごろつきばかり……)

そんなことを考えながら、メルフィナはしばらくその場に立ち尽くしていた。

もうすぐ昼になろうかという街の喧騒の中、アッドは交差点の片隅に身体を預けていた。

朝からすでに三時間にはなろうか、パーティなどどうでもいいアッドは声を掛けられるのを待っていたのだが、彼の纏う独特の雰囲気のせいだろうか、彼がエルフだからであろうか、一度商人に声を掛けられたくらいで、誰からも誘いを受けていなかった。

「……」

アッドは自分の中で次第につもる怒りを外に出さないように勤めていた。

アッドが少し早いけど昼でも食べようかと考えていたそのとき、

「お前は剣士か？」

アッドの保たれている壁からは死角で見えない位置から声がかかる。

声からするに若い男のようだった。

「……そうだ」

アッドは姿も見せずに声を掛ける男に不快を覚えたが、これで道端に立っていなくてもいいのだと自分に言い聞かせ、自然なように返事を返した。

「それはよかった、私たちはエルフの剣士を捜してるんだ」

「……そうなのか」

「申し遅れた、私はエリックという。アーチャーだ、よろしく」

「そういいながら、エリックがアッドの前まで来た瞬間、表情が一変する。」

「なっ、貴様、ハーフだな。その黒い髪がなによりの証拠だ」

その顔には嫌悪感という文字が張り付いている。

「……」

一方アッドはそんなこと知らない。だが、この失礼な輩にありありと嫌悪感を示され、愛想笑いを浮かべられるほど卑屈な精神は持ち合わせていない。

「……だったらなんだ」

アッドも怒りを露わにして食って掛かる。

「忌むべき血よ、我が弓で葬ってやろうか」

アッドを睨み付けながらエリックは背負っていた弓に手を掛ける。

「……」

アッドも黙って、しかし殺気十分に腰の長剣に手を掛ける。

しばらくはらみ合いが続く。

周りにはすでに野次馬ができ、二人をはやし立てるものまでいる。

じりじりと身体を動かし、相手との間合いを探りながら二人は交差点の中央まで移動してきていた。

またもにらみ合いが続く、しかし今度は開始のタイミングを計っているようだ。

この頃には、辺りで騒いでいた野次馬も、二人から伝わる殺気を感じ、周囲は静寂に包まれていた。

「……」

「……」

もうしばらくにらみ合いが続くかと思われたとき、野次馬の中の子供の手から木の桶が滑り落ちた。

地面と木が当たる音が響いた瞬間、二人は同時に動いた。

瞬時に後方へ飛び、エリックは同時に二本の矢を、まっすぐにエリックへ駆けるアッドへ放つ。

弓がアッドに当たる瞬間、

「なあっ!？」

野次馬から起こる素っ頓狂な声。そのはず、野次馬からは速すぎてアッドの身体を弓が通り抜けたように見えたのだ。その実、アッドは高速で横に飛び、すぐさま元の位置に戻ってきただけである。

「やるじゃないか」

アッドが横飛びをして出たタイムラグを利用して、エリックはさらに距離を取り、矢をセツトしていた。

「……」

今度は三本で放たれる矢。

しかし、アッドは剣を一閃し、全てを弾き、全く速度変えぬままエリックに駆ける。

驚愕の声が野次馬からあがる。

エリックに肉薄し、横に剣を一閃。

バックステップで交わし、身体を一回回転させる間に、矢をつがえているエリック。にやりと笑い、矢を放つ。

「……」

放たれた矢は、アッドの身体に巻かれたマントを通過して地面に突き刺さる。

紙一重で矢を交わし、さらに剣を一閃させる。

アッドの刃はエリックの頬を浅く風ぐ。

「ちっ」

大きく後ろに飛ぶエリック、それを追うアッド、

交差する寸前、

「おまちなさい」

朗々とした声が辺りに響く。

ピタッと身体を止める二人。

エリックは矢をつがえた弓をアッドの肩間に、アッドの長剣はエリックの胸を風ぐ位置に止

まっている。

二人が声の主を見ると、

「この街での戦闘行為は許しません」

それは王女エレインであった。

「……」

「失礼致しました」

二人は同時にエレインに膝をついて礼をする。

「また貴方ですか、貴方は魔王討伐よりもいざこざを起こすのが目的ですか？」

「くっ」

周囲に笑いが起こる。

なすすべ無く唇を噛みしめるエリック。

目はお前の性だとアッドを睨み付けている。

「貴方は？」

今度はアッドにその剣幕を向けているエレイン。

「……アヴァウッド・キャメロンです。姫様」

「そう、私に付いていらっしやいアヴァウッド」

「姫様！？」

その言葉に驚きの声を上げるエリック。

「……かしこまりました」

「では、参りましょう。エリック、次にもめ事起こしたら、わかっていますね」
「はっ」

苦虫を噛みつぶしたような顔でエレインを見送るエリックであった。

「……では、さっさと行きなさいアヴァウッド」

少し離れたところでアッドはいきなりそう告げられ、少し唖然となる。

「私は、あなた達のようなごろつきは認めません。魔王が倒せるとも思わないですし、嫁になる気もございません」

強い調子でさつと言葉を継げるエレイン。

アッドもありありとした敵意を感じ、またもイライラしていた。

「……そうですか姫様」

そう言い、エレインの元を離れるアッド。

そして、振り向かず、

「……私とて、このような国も、あなたの様な女も欲しくはありませんよ」

そう言い、足早にその場を去った。

集まったものは権力目当てばかりと思っていたエレインは怪訝そうな表情を浮かべたままその場に立ち尽くしていた。彼女自身がバカにされたことに気付いたのはそれからしばし時が経ってからであった。

街を歩くアッドは、明らかに機嫌が悪かった。今日は不快な奴に二人も出会った。エリックとエレインのことである。

「……」

気が付けば、日は暮れ、またも宿屋街まで歩いてきていた。

ふと昼間の事を思い出せば、エリックの顔が思い浮かんでくるのだろう。

そのたびに軽く舌打ちをしてしまうのだった。

しかし、ふっと思い出したエリックの言葉。

『ハーフだな』

ハーフ、ハーフ……。

その言葉を反芻すると、頭の奥でひどい鈍痛が響いた。

「くっ」

その鈍痛に耐えきれなくなり、フラフラとしてしまうアッド。

頼りない足取りで歩くアッドは、とうとう人にぶつかってしまう。

「……すまない」

「どうしたんだい？」

見上げたアッドの瞳には、黒いジャケットに身を包んだ金色の瞳の男が写っていた。

「ああ、食った食った。いやー、こんなにうまい魚のソテーとチキンの香草焼き食ったのは初めてだね、俺。まさに絶品だ」

食堂の真ん中の席で腹に手を当てながら満足げに呟くロア。机の上には食べ終わった皿が山のように積まれてある。

「お兄さんよく食べるわね。こんなに食べる人わたしや初めてみたよ」
食堂のおばさんが呆れたように言う。

「やっぱりちゃんとお食べとかなないと元気でないからね。おいしかったよ、ごちそうさん」
そう言ってロアは椅子から立ち上がると、会計を済ませようと財布を取り出してあげた。

「幾ら？」

「はい、ありがとね。九八〇〇ギルになります」

「九八〇〇ね。あんだけ食べたのにやすいな」

そう言って笑いながら財布の中身をみたロアだったが、その笑顔が凍り付いた。

（あれ……俺ってこんだけしか金持ってなかったけ……おかしいな、確かもうちよいあったはずなんだけど……あ、あれだ、前の町で煙草三カートン買ったんだ……）

「……ははは。おばちゃんちよっと待っててね。すぐ金作ってくるから」

不思議そうな顔をするおばちゃんをよそに、ロアは店の外へ出て辺りを見回した。

(うーん、誰がいいかな。よし、あいつにしよう)

ロアは足早に人混みを分けて歩いていくと、マントを羽織った男に近づいてわざとぶつかつた。マントの男は何か考え事をしていたようで、ロアに気づくこともなく思いっきりぶつかつて倒れた。

「……すまない」

倒れた男が立ち上がって言った。

「いやいやこちらこそ。それよりあんた勇者募集に参加した人か」

ロアが言う。

「……そうだが」

「いやーあんた運がいい。旅立ちの今日の日に俺みたいな男に出会えるとわね」

「……?」

マントの男はうさんくさそうにロアを見ている。

「あんた見たところ一人だね。誰ともまだパーティを組んでない。だったら俺と組まないか。

オーガを越える腕力とエルフに匹敵するこの知性、暗黒の魔法を操り、そしてなによりハンサムなこの大吸血鬼ロア。一家、いやーパーティに一人このロアを。ほんとなら契約金一〇〇万ギルなんだが、今なら九十九%オフの九八〇〇ギルだ。お買い得だろ」

「……アホらしい」

マントの男はロアの前から立ち去ろうとする。そのマントにロアがしがみついた。

「なああ、頼むよお。人間の食い逃げ犯ならちよつと独房に入るだけなんだろうけど。俺の場合教会に連れて行かれて、張り付けにされて火あぶりの刑になるんだよお」

「……そんな泣きそうな声で言われても知らん」

「いや、助かった。契約成立だな。ありがと、恩に着るよ」

明るい顔で言うロア。その手には誰かの財布。

「……貴様、すったな」

マントの男がハツとして、腰の剣に手をかける。その剣はニメートル近い長剣だ。

「すったなんて人聞きの悪い。ちよつと借りただけじゃないか。おーい、おばちゃん。金でき
たよ」

他人の財布を持って、食堂に走り込んでいくロア。マントの男、アヴァウッド・キャメロンはこの変な男ロアのペースについていけずただ呆然としていた。

「俺の名前はロア・ソア。よろしく。いやー俺も仲間探してたところなんだよね」

アッドになかば強制的についでいてくるロアが言った。髪は銀髪、瞳は金色をした吸血鬼だ。二人は当てもなく人混みを歩いている。

「へえ、あんたエルフか。珍しいな、黒髪のエルフなんて。なあ、あんた名前は」

「……アヴァウッド・キャメロン」

「長くて覚えにくいな。アッドでいいだろ。よろしくアッド」

「……」

握手をさしだしたロアを無視するアッド。

「つれないやつだな。おっと、やばい……」

ロットはそう言うのと無造作に、すれ違った男がかぶっていた帽子を盗んでかぶった。そのままうつつむき加減で歩いていく。

「……どうした」

「あれだよ」

アッドが聞くとロットは道の向こうから来る騎士の一団を密かに指さした。銀に輝く鎧と派手な装飾を施したそのおよそ百ほどの騎士団は、馬に乗った女性の騎士を先頭に道の真ん中を堂々と歩いてくる。町の人たちは道を空け、中には跪いて祈り出す人までいる。

「イーリアス教第十六騎士団のやつらだ。昨日の昼からずっと追われていてね。俺を追ってこの町まできたようだな。みつかるとやばい。特に先頭の女は超危険人物だ。ありや完全にイカれてる。名前は確かリユネットだったかな」

ロアにそう言われてアッドは騎士団の先頭の女性を見た。年齢は二十歳ぐらいの金髪の美しい女性だ。

「団長、よろしいのですか。アヴァロン王の許可なしに僅か百騎とはいえ騎士団が隊列を組んで町中を堂々と探索しても」

リユネットの後ろの騎士が心配そうに言った。

「かまいません。なにをためらうことがあるのです。我らは世界の秩序を守る神聖なイーリアスの騎士団ですよ。アヴァロン王は敬遠な信者と聞きます。邪悪なヴァンパイアを退治するという我等が神聖な目的を助けこそすれ妨げるとは思いません。だからいちいち許可など取る必要もないし、そんな時間ありません」

「しかしですね……」

「しかし、予想外でした。まさかと思って調べてみたら、あの吸血鬼が勇者募集に参加しているのとわ。あの吸血鬼も何をたくらんでいるのか……どうせろくなことではないでしょう。それにその参加の許可を出したのは、あのエレインとか言うアヴァロン王の第一王女らしいですね。聞けば彼女はイーリアス教の信者でもないとか。邪悪な吸血鬼に参加許可を出すなんて、あの吸血鬼と何か特別なつながりがあったのことに違いありません。まったくあの馬鹿王女が……いざれ異端審問に掛けてやります」

リユネットが辺りに聞こえるような大きな声で言う。

「団長、そんな物騒な話をレオデグランスの町中でやられては困ります。万が一、アヴァロン王の耳に入ったら……」

騎士が蒼白な顔になって言う。

「うるさいっ、あの吸血鬼はまだこの町にいるはずですよ。吸血鬼の被害者がでる前に、さっさと見つけ出しなさい」

リユネットは痲癩を起こして周りに騎士に叫んだ。

「あのクソ吸血鬼、こんどこそ殺してやります。汚れた魂の一片も残さず消し去ってやります。積年の恨みを今日で晴らします。首を洗ってまっぴらなさい、ロア！」

リユネットがそう言っただけを睨んだ。

「な、あの女、言うことが完全にイカれてるだろ」

道の端で騎士団が通り過ぎるのを待ってからロアが疲れたようにアッドに言った。

「……確かにな」

アッドも呟く。

「俺を見つければ、そこが教会だろうが町中だろうが王の御前だろうが容赦なく神聖魔法ぶっ放してくるような女だ。おまけになまじ魔力が強いから手に負えない。まさに人間ダイナマイトだぜ。俺も何度殺されかけたか……どうして教会もあんな女を騎士団の団長にしたのかね」

「……彼女になにかしたのか」

「なーんも。そもそも俺は人の血なんて吸ったことなんてないし。まあ、あつちはそうはおもっちゃいないようだけど。ま、遺跡荒らしや盗みぐらいはするけどね」

そう言っただけは盗んで被ってあった帽子を脱いで指で回した。

「……さっきも俺の財布を摺ったが、おまえシーフか。それともトレジャーハンターか」
アッドが聞く。

「さあ、別に考えたこともないね。ただ吸血鬼じゃあろくな職業になんてつけないから、生きていくためにやってただけさ。遺跡に入って骨董品盗んできて闇商人にうっぱらう。そうやって生計立ててきたからな」

ロアはそう言って帽子を道端に投げ捨てた。

「俺が勇者募集に参加したのも金のためさ。魔王を倒して、その金で小さな島を一つ買う。俺はそこで暮らす。そうすりゃ俺が人間に迷惑掛けることもないし、人間も俺のことをほっといてくれるだろ」

「……」

「まあ、勇者募集の参加にはもう一つ理由あるんだが……そっちはもっと個人的な理由なんだから話すほどのことでもない」

ロアは笑ってそう言った。

「さーて、これからどうする。あんたがリーダーなんだからあんたが決めてくれ」

「キヤメロン中央広場に設けられた勇者募集会場。そこにネッコが辿り着いたときにはすでに大方の参加者が受付を済ませており、パーティを組もうとメンバーを探す者、身内や友人達と出発前の暇乞いをする者などがちらほらと残っているだけであった。

「そのメイド君」

杖でコツコツと床を鳴らしてメイドを呼び止めるネッコ。どんな紳士かと半ば期待して振り返ったメイドは、自分と呼ばひ止めたのが年増も行かない青年だと分かり、思わず口元が緩んだ。

「受付はどっちかな」

「受付ですか？各テントで行ってますよ。ここからだ、あそこのテントが一番近いです」

メイドが指差したテントには、様々な人種、職業の者たちが十数人の列を組んでいた。最後尾は頭にターバンを巻き、巨大な曲刀を腰に携えた異国の戦士。それは、レオデグランスの敵国、ペルセンの者だった。

「あそこのペルセン人の後ろに並べばいいのかい？」

ネッコの言葉を聞いて、メイドの顔は凍りついた。

「ペルセン人……！ 噂は本当だったのね」

「噂？」

「今回の勇者募集の告知を受けて、国力を上げて魔王を倒す計画がペルセンにあるらしいのです……」

ペルセンとレオデグランスの争いは数百年の歴史を隔てて未だ決着がついていない。砂漠の王国ペルセンは、その不毛の地から抜け出すために、また王国の勢力拡大を図って幾度も幾度も侵攻をかけるのだが、豊かな内政力と軍事力を誇る大国レオデグランスに度々敗北を喫している。

また、逆も然り。レオデグランスは、長年の血戦に決着をつけるため数千の軍勢を率いてペルセンへと侵攻したことがあったが、いざ敵国に辿り着いた時には、わずか数百名の兵隊しか残っていなかった。無限とも思える砂の大海を渡っての進軍は、恵まれた大地しか歩んだことのないレオデグランスの兵隊達にとってあまりに過酷なものだったのである。膨大な数の行方不明者と共にレオデグランスの大進軍は失敗に終わった。

そんな膠着した状況の中、今回の王位継承を条件とした勇者告知は、まさにペルセンにとつては百世にまたとないチャンスである。

「ふん、正攻法では落とせないから間接的に乗っ取るわけか。アヴァロン王はそのことを知っているのかな？」

「ええ。その上で全国籍、全種族を問わないと言われましたわ」

「アヴァロン王、勇者の血は本物か……」

「くすくす……」

どこか幼さの残る風貌に似合わぬネツコの不遜な態度に、メイドは思わず笑みをこぼした。当のネツコは怪訝そうな顔でメイドを見ている。

「お若いんですね、魔法使いさん。そんなお年で魔王と戦うなんて怖くないのですか？」

「失礼なメイドだな。僕はこう見えても十八だ、いよいよ魔力に脂が乗ってくる年さ。それに……魔王はあくまで僕の目標の一プロセスにすぎない」

「目標？」

「そうだ。僕は世界一の魔法使いになるんだ」

「ぶっ……あはは！」

笑いたければ笑うがいいさ！ と、心で毒づきながら、ネツコは顎をポリポリと掻いた。

その時、メイドはネツコの背後に立つ人物に気が付くや否や笑うのをやめて、丁重に頭を下げた。あまりに急な変わり身にネツコは驚いた。

「やはり、あなたはヴァンスタイン家の……」

気品ある声に振り返るネツコ。そこには、ここレオデグランスの王女、エレイン姫とその護衛隊長であるライオネルの姿があった。

「これはエレイン様。ご機嫌麗しゅう」

丁寧にお辞儀をするネツコ。

「ネツコ・マズルカ・ヴァンシユタイン、元気そうで何よりです。ルドヴィヒ殿は如何なさっ

て？」

「祖父は相変わらず塔に籠りきりで……きつと自分の研究に没頭しているんでしようね。全く、あの人の人間嫌いにも困ったもんです。なにしろ、孫の私ですらもう三年も顔を合わせておりませんから……」

「おや……では今回の魔王討伐には……」

「出てきませんでしょう。興味も無いでしょうね。魔力は肉体とともに衰えるものですから……祖父も寄る年波、もうあの人の時代はとづくに終わっています」

そして次は自分の時代だ、とでも言わんばかりの自信を伴ったネツコの言葉。エレインとライオネルはお互いの顔をちらりと窺って、頼もしい魔法使いの登場に口元を綻ばせた。

「期待しておりますわ、ネツコ」

二人のやり取りを後ろで見ていたライオネルが一步前にでて、右手を差し出した。

「私からも健闘を願おう。世界一の魔法使い志望、ネツコ・マズルカ・ヴァンシユタイン君（うが……聞かれてるし）」

頬を赤く染めながらライオネルと握手を交わす。どうせ今生会うことのないのメイドだと思つて切つたタンカが王女にまで聞かれていた……その事実、ネツコはほんのちよつと死にたくなつた。

二人が城の中へと戻つていく姿を、しばらく眺めていたネツコ。ふと、奇妙な視線を感じる。先ほどのメイドだった。

「……王女様から声をおかけになるなんて……キミ、一体なものなの？」

哑然とした表情で訊ねるメイド。

「……だから、世界一の魔法使い志望だってば」

中央広場を出発し、キャメロンの大通りを歩きながら、ネッコは考えた。

（さて……まずはパーティが必要だ。それも前のような中途半端な連中ではなく、とびっきり強い仲間がほしい……もちろん、ここキャメロンに世界のいたるところから猛者達が集まっている今がチャンスだ）

まずは、ネッコは酒場へと向かった。様々な冒険者達が集う定番の場所。しかし、ネッコのお眼鏡に敵う力量の持ち主は現れなかった。

（こういう場所には中々いないもんだな。猛者というよりも、ただ野蛮な人間ばかりだ。それにもうパーティを見つけた人間が結構いるな。ちえ、選ばなきや僕だって……）

次にギルド。傭兵や冒険者達が様々な人々の依頼を受ける、いわば依頼主との仲介所だ。

店の中には数人の戦士たちが自分にあつた依頼を探していたが、この依頼仕事を糧として生かす職業戦士達ばかりで、魔王を倒そうというほどの気位をもった者は一人も見受けられなかった。大きく溜息をつくネッコ。

（ふう……勇者志望はさっさと北へ向かったかな）

「その魔法使い」

背後から凜とした声が聞こえ、振り返るネッコ。逆立った髪の毛に真っ白の鉢巻、たいそう立派な鎧を着た二十ぐらいの剣士がそこにいた。

「私の名前はロット・ステイルバン。勇者を目指している」

聞き覚えがある名前だった。英雄騎士、ロット・ステイルバン。幼いころより剣術に無双の才を発揮し、十代の若さで様々な戦局を切り抜け、レオデグランスを勝利に導いた天才剣士だ。
(勇者大本命……か。彼もまだ一人なのか？意外だな)

「魔法使い。もしフリーだったらこの私と組まないか？一緒に魔王を倒そう」

礼儀正しい態度で挑むロットだったが、胸中は穏やかではなかった。

彼は国中から賞賛を浴びる反面、孤独だった。パーティメンバーを探そうにも、英雄ロットの名を聞いた途端、あるものは卑しくへりくだり、またあるものはただ尊敬の眼差しを向けるだけでマトモに取り合おうとはしない……たまに力のある者を見つけたと思えば、対抗意識に距離をとろうとしてくる。英雄の気質、それこそがロットを孤独に追いやる原因だった。

(私はこんなところでモタモタしてられないんだ……神は私に力を与えた。なのに、どうして道を示したまわぬ……！)

焦る気持ちを押さえながら、ロットはふたたび訊ねた。

「どうだ、魔法使い。見たところなかなかの腕前ようだ。私も腕には多少の覚えがある。きっと期待に添えるよう……」

「英雄騎士ロット……か」

ネッコがポツリと呟く。また駄目なのか？ロットはさすがのような気持ちでネッコの返事を待った。

「ロット……僕と組めるだけの實力はあるのかい？」

「……なに？」

思わず聞き返す。

「英雄は名前だけではないだろうな。僕の足を引っ張らない自信はあるか？」

なんだこいつは？ロットは驚いた。自分の名前を知っていながら、臆するどころかこのような威圧的な態度をとる者など、少なくともこのキャメロンには一人もいなかった。

（仮にも王国の英雄と称えられた私が足を引っ張るだなんて……この魔法使いは本気で言っているのだろうか？単なる虚偽脅し？だが一体なんのために？）

ロットの胸中は複雑だった。

（……私の目も曇ったか？いや、あるいは……）

「なにを笑っているんだ、お前は」

ロットの頬が緩んでいるのを見て、ネッコが言った。

「わらう……私が？」

「……うん。思いつきり」

この不敵な魔法使いが本物だったら……そんな考えがロットの脳裏をよぎったのだろうか。

ついに魔王と立ち向かえるだけのポテンシャルをもった人物の登場に、ロットは無自覚に高揚していたのだった。

(だが、もし偽者だったら……私はとんだマヌケだな)

その時、町の人々のどよめきと共に、百はあろうかという軍勢がギルドの前を横切った。重い甲冑ががちやがちやと鳴らしながら闊歩するその姿は、穏やかではない。

「あれは……神聖騎士団！ 悪魔でも攻めてきたか……？」

ロットははっとして、ギルドの外に飛び出した。

(悪魔……そうだ！ この魔法使いの実力を窺い知るチャンスじゃないか！)

「きたまえ、魔法使い！ 君の実力が見たい！」

そういうと、ロットは騎士団の最前列を目指して走り出した。

(英雄騎士って変なやつだなあ……)

しかしながら、自分に相応しいメンバーをやっと見つけたのはネッコにとっても同じことだった。せっかくのチャンスを逃すまいと、ネッコはロットの後を追いかけていった。

キャメロンに着き、しばらくその場で辺りを見回していたメルフィナの目に、騎士団の姿が目に入ってきた。

（あれは神聖騎士団……どうしてここに？）

メルフィナは、その騎士団の先頭を行く女性に目をやる。しばらくすると、その女性もメルフィナに気づいた。そして、騎士団を止め、メルフィナの近くにやってくる。

「メルフィナ・ルーベルドラクロア、貴殿が何故キャメロンに？」

「リユネット、あなたこそどうしてここに？ それにあの騎士団は、どういった意味でしょう？」

リユネットの問いに、問いで返すメルフィナ。二人の表情は対照的であった。メルフィナはにっこりと微笑んでいるが、リユネットに笑顔はない。

「貴殿ら司祭達には関係ないことです。さっさとラヴィーンにお帰りなさい」

「あらあら、困りましたわね……」

そんな言い合いをする二人の前に、鎧を着込んだ男と、魔道士らしき男が走ってくる。

「司祭までおられるのか。神聖騎士団がこの街にいるとは、一体何事ですか？ 神聖騎士団が出

てくるくらいだ。魔族でも現われたのでしょうか？」

鎧を着込んだ男は、少し興奮気味に問い続けた。

「あなた達は？」

「私の名はロット・ステイルバン。勇者を目指している者です」

「ネッコです」

ロットと名のつた男は丁寧な、ネッコと名のつた男はつぶやくようにそう言った。

「ロット……名前は存じてます。しかし、あなた方がそれを聞いてどうするおつもりでしょうか？」

「もちろん、協力するつもりで聞いております」

その言葉に、リユネットはしばし黙って考え込んだ。そして、その口を静かに開いた。

「わかりました。お教えしましょう。実は、この街に吸血鬼が潜り込んでいます。その吸血鬼は、あるうことか、勇者募集に参加までして……何を企んでいるのか……」

（ふーん……吸血鬼が勇者募集ですか……）

メルフィナは、その話に少し興味を持った。ごろつきばかりが集まる最中、吸血鬼が勇者募集に参加しているというのだ。興味を持たないわけがない。

「なるほど。それは一刻も早く退治せねばなりませんな。このロットとネッコ、協力させていただけます」

「わかりました。では、もし吸血鬼らしき者を見つけたら、すぐに知らせてください」

リユネットはそう言い残し、騎士団を率いて行ってしまった。

「知らせるだど？その必要はない。吸血鬼なんて、僕の力があれば倒せるよ」

「そうか、なら行こうかネッコ」

そう言つて、二人の男達は歩き出した。しかし、間髪いれずに辺りに爆音が響き渡る。メルフィナ達はその音の方に目をやると、先程騎士団が歩いていった方角から煙が舞い上がっている。

(リユネット……この街中で、あんな大きな魔法を……)

自然と頭を抱えるメルフィナ。

「あれは騎士団が行つた方角……もう見つかつたのか！」

そう言いながら、ロットはその煙が上がっている方へと走り出す。

「くそつ、僕が行くまでやられるんじゃないぞ！」

続いてネッコも走り出した。メルフィナは行くかどうか迷っていたが、しばらくして、その方角へと走り出していった。

「くそー、こうも簡単に見つかつちまうとは！」

そう吐き捨てながら、屋根の上を走る青年。その後ろを、エルフの男も同じように走っていた。

「いやー悪いね。巻き込んだじゃってさ。まあ、全然余裕で逃げ切れるからいいけど

さあ……あんたもなかなかいい身のこなししてんじゃん」

「……とんだ災難だな」

その二人を、騎士団が懸命に追っている。

「待ちなさい吸血鬼！ 今日という今日は逃がさないわよ……！」

そう言いながら、リユネットは神聖魔法を唱え、それを青年に向けて放射する。騎士団の方も、次々と神聖魔法を唱え、青年を狙っていた。しかし、狙われた青年は、その魔法の数々を人並みはずれた脚力で、飛び、かわし、走り続ける。

「へっ、余裕余裕」

と、言いながら青年が着地した家の屋根がバキッつという音を立て、破れたのだ。青年は、足を取られて、身動きができなくなる。そこに、数本の矢が放たれる。

「くっ、やばい！」

その青年を見て、エルフは剣を抜き青年の元へと跳んだ。そして、放たれた矢をすべて薙ぎ落とす。

「す、すごい……あれだけの矢を落とすあのエルフもだけど、あの吸血鬼、バケモノみたいな運動神経だ」

下で見ていたネッコが、感嘆の声を上げる。

「まあ、実際バケモノなんですけどねえ」

メルフィナがつっこむが、ネッコの耳にはまるで届いていなかった。それだけネッコは、そ

の二人組みを熱い眼差しで見ていたのだ。

「……すまないロット」

「ん、どうしたのだネッコ？」

ロットは問うよりも先に、ネッコは走り出していた。

「僕はあるの二人について行くことにする。やっぱりあんたとは組めない」

「何！？ それはどういう事だネッコ！」

ネッコはその問いには答えず、代わりに魔法の詠唱を始める。そして詠唱が終わると、その魔法を神聖騎士団の方へと向けて放った。その魔力弾は、騎士団の中心で大爆発を引き起こした。

「な、なんとという魔力だ……！」

それを見ていたロットが、驚きの声を上げた。

(確かにすごい魔力……それに、あの二人も相当の実力者ですわね)

「くっ、あの魔法使い、裏切る気ですわね。構いません、あの魔法使いごとやってしまいなさい！」

リユネットの合図に、騎士団から多数の魔法、矢が放たれる。しかし、ネッコと騎士団達の間、瞬時にして何者かが出てきた。

「……シールド」

それはメルフィナだった。メルフィナは静かにそう呟き、左手を騎士団の方へと指し出す。

あうると、メルフィナの前に少し透明度の低い壁が現われ、魔法、矢をすべてはじき返してしまつた。

「なっ……なんのつもりですかメルフィナ！」

「リユネット、私に提案があります。私がここに来たのは、勇者募集に参加するためです。そこで、私は彼らとパーティを組もうと思います」

「吸血鬼とパーティですって!？」

「吸血鬼といつても、悪い子じゃなさそうじゃないですか。それに、リユネット、あなたはこれだけ街を破壊して、あの子に傷一つつけられましたか？」

「そ、それは……」

「それに、さっきの魔法で負傷者も多く出たでしょう。一度ラヴィーンに退いてはいかががでしよう?」

「くっ……それでもし、手遅れになるようなことがあったら、あなたはどうするおつもりですか……?」

「大丈夫、少しでも妙な動きをしたら、その時は私があの子を始末いたしますから」

涼しい笑顔でそう言い放つメルフィナ。そして、騎士団に背を向け、三人を追って走り出していく。

「メルフィナ・ルーベルドラクロア……このままじゃ済ませませんわよ。一度ラヴィーンに退く! 各自、負傷者の救出を急ぎなさい!」

リユネットのその言葉に、騎士団たちが行動を開始した。

「ネッコ……あれほどの魔力の持ち主だったとはな」

四人が行った方向を眺め、一人静かにロットは言った。

「追ってきてないな」

「……ああ」

街外れまで駆けてきた二人は、後方を確認して一息つく。

「どやって仲間を捜す？あんだだけの騒ぎをやっちまうと、さすがに見つからないかもしれないぜ？」

「……そうだな」

ロアの言葉に考え込むアッド。

しばしの沈黙が辺りを包む。

その時、

「この辺りに向かったと思っただけど」

アッド達の耳に人の声が届いた。

瞬時に二人は警戒態勢となり、声のした方を伺う。

「……数は」

「一人だな」

同じ事を考えていたらしく、視線だけで会話をする。

「こっちか？」

さらに近い位置で声が出たのをきっかけに二人が動く。

ロアが駆け、アッドが剣を抜く。

「動くな」

男が気が付いた頃には、ロアは男の背後に、アッドは剣をのど元に突きつけていた。

「なっ！？」

油断していたらしく、あっさりと囲まれてしまう男。

「騎士団がしつこいのは知ってたけどよ、こんなひよっこを一人で送るとはね」

ロアそのセリフに男はカチンときたらしい。

「ひよっこじゃない！」

そう言った瞬間、男の身体から閃光が走る。

「くっ」

ロアとアッドは一瞬目が眩み、男を見失う。

視力を戻した二人の目には、少し離れた位置で男が火炎球をこちらに向けているのが写った。二人の顔が険しくなり、さらに殺気が強くなる。

しかし、火炎球はなくなり、

「僕はお前達と戦いに来た訳じゃない」

男はそう言った。

「……」

「なんだって？」

二人して怪訝な顔をする。

「僕はネッコ・マズルカ・ヴァンシユタイン。魔法使いだ。お前達の仲間になってやろうと思ってるね」

ネッコはそういうと、おもむろにロアとアッドに近づいた。

「俺らにそれを信じろっての？」

「そうだ。さつき、ひよつこと言ったことは水に流してやるから、僕を仲間にしろ」

「……」

ネッコの物言いに、啞然とせざるを得ないアッド。

「って言ってるけどリーダー、どうする？俺はおすすめしないぜ」

「僕はものすごい魔法使いだぞ、仲間にして損はない」

「……」

「とりあえず、礼儀として僕が名乗ったんだからお前達も名乗って欲しいな。特にその失礼な口をきく吸血鬼」

「おれが吸血鬼ってことを知ってるってのはなにかい、おまえさんかなりの物好きだな。吸血鬼のいるパーティに入ろうとしてるんだからよ」

ロアはネッコに興味を持ったように好奇心の目を向けた。

「お前達の実力が、僕に釣り合うと思ってるね」

自信満々にそう言うネッコ。

「ははは、そいつはおもしれえ、俺は大吸血鬼のロア・ソア様だ。隣のエルフは俺らのパーティのリーダー、アヴァウッド・キャメロン。凄腕の剣士さんだ。って言ってもまだ二人のパーティだけだな」

剣を納めながらネッコに相對するアッド。

「……」

アッドはネッコを見極めようとしているかのようにネッコを見つめている。

「なありーダー、俺こいつが気に入ったよ、おもしれえじゃん。仲間に入れてやろうぜ。第一、こんなパーティに入ってくれるような奇特な奴少ないぜ？」

アッドの隣でロアがそう言う。

ネッコは仲間に入れてやろうぜの部分でピクッと反応を示したが、おおむねロアの意見が正しいという表情をしていた。

「さっきの魔法もみたる？実力はけっこうなもんだぜ、口だけじゃないね。これは吸血鬼の力」

ロアはそうアッドの耳元で付け足した。

「……確かにな」

ロアの説得の甲斐あつてかアッドはネッコを向かえることに決めたらしい。

「……ネッコ。これからよろしく」

「ああ、冴えないお前達をしっかりと助けてやるよ」

「かわいくねえやつだ」

アッドとネッコのやり取りを端から見て揚げ足を取るロア

しかし、その表情には面白くてたまらないといった表情が張り付いていた。

「あの、もののついでに私も仲間に加えていただけませんか？」

三人の背後でいきなり声がした。

瞬時に警戒態勢になり、振り返る三人。

「あらあら、ダメですか？」

しかし、その声の主の緊張感の無さに、三人の警戒は萎えた。

「あのねお嬢さん、これは遊びじゃあ……」

ロアはそう声の主の女性に語りかけようとして凍り付いた。

「ええ、わかっていますわ。遊びではございません。本気ですわ」

「どうしたんだ？ロア」

氷付いたロアに怪訝そうに声を掛けるネッコ。

「イーリアス教の司祭じゃねえか！」

顔を軽く青くしながら発したロアの絶叫はキャメロンの街外れに木霊した。

メレアガンズは暗い廊下を歩いていった。あたりに自身の靴音がカツーン、カツーンと響き渡る。彼がここを歩くのは何百年ぶりだろうか。全身を漆黒の鎧で包んだメレアガンズの姿は数百年の時をたっても少しも変わっていない。十三使徒として魔王モートに不死の力を与えられた結果だ。

メレアガンズ、不死の騎士という呼び名を持つ十三使徒の一人。暗黒の鎧に身を包み、巨大な黒馬に乗って戦場を駆け抜けたとされる武人だ。

やがてメレアガンズは大きな門を開け、一つの部屋に入ってしまった。その部屋は広く、暗いが美しい装飾が施されてあった。中央にはテーブルに向かって一人の男が腰をかけている。黒く長い髪で、顔つきはせいぜい三十代、豪勢な貴族風の服装を着た男だった。テーブルの上にはチェスの盤、どうやら思考中のようで男はメレアガンズの方を見ようともしない。やがて、腰掛けた男がゆくゆくと指を動かした。すると盤上のチェスの駒が独りで前方のマスへと動いた。

「チェスというゲームは大変おもしろい。相手より先を読んで、適切な場所に適切な駒を配置したものが勝つ。実際の戦争と同じだ」

そう言って男は笑った。そしてメラアガンスの方を向く。

「メラアガンスか。随分久しぶりだな。三百年ぶりくらいか」

豪勢な椅子に腰掛けている男、モードレッドが言った。

「貴公も変わらないようでは何よりだ。しかしモードレッド、今回のことはどういふことだ」

「今回のこととは」

「魔王軍再結集のことだ。偉大なるあのお方の命令もなしに再び軍を集めるとは。それとも貴公は直接あのお方に会ったとでも言うのか」

「偉大なるあのお方か……お前は偉大なる魔王モートが死んだとでも思っているのかね」

「まさか……あのお方が死ぬはずなどあるまい。しかし、未だにお姿をあらわさんのも事実だ。それなのに軍を動かすとは、少し軽率ではないか」

モードレッドはメラアガンスの問いには答えず、話をそらした。

「お前は偉大なるあのお方がいなくなられてから数百年、今まで何をしていたかね」

「ずっと偉大なるあのお方を探し続けていた。世界中を回ったが、未だに手がかりすらつかめん」

「ふふふ、真面目なお前らしいな。わざわざ自分の体で世界中を回るとは。まったく、ご苦労なことだ」

モードレッドは笑った。メラアガンスはその笑いが癩に障ったよう顔をしかめた。

「そういう貴公こそ何をしていたので」

しかし、モードレッドはまた話をそらした。

「……なあ、メレアガンス。私はかつて人間の王だった。その私が十三使徒の一人に招かれ、そればかりか副王の称号までを与えられたのはなぜだと思う」

「貴公が忠実で有能な武将だったからだ」

「ふん、お前はほんとに真面目なやつだ。私は他の十三使徒と比べて特別魔力が高いわけでも、お前のように異常に武芸に優れているわけでもない。私が重く用いられたのは、私が誰よりも優れた指揮官だったからだ。私は生まれてこの方、戦争というものに破れたことがない」

モードレッドが指を動かした。チェス盤上のクイーンが激しく飛び、敵方のキングを粉々に砕いた。

「私はこの数百年、じつと身を隠し、軍の増大に力を注いできた。そしてようやく再び世界を統一できるだけの戦力を集めた。他の十三使徒の内の何人かとも、すでに連絡は取れている。これで世界は再び我々のものだ。近々、大規模な侵攻作戦を考えている。どうかね、メレアガンス、ぜひ君の力も貸して欲しいのだが」

「断る。私はあるお方がいない世界統一などに興味はない。ここにもあるお方がいないとわかれば、再び搜索の旅に出るだけだ。貴公は世界統一でも何でもかかってにするがいい」

メレアガンスはそう言ってきびすを返すと、ドアの方に向かった。しかし、途中で立ち止まる。

「そうだ。大事な用件を言うのを忘れていたな。なんでもレオデグラランスの地で勇者募集とか

いう事が行われているらしい。貴公の魔王軍再結成をよほど警戒してるのだろう。貴公も気をつけた方がよい」

メレアガンスが言った。

「お前に言われずともそれくらいのは耳に入っている。くだらん行事だ。ただでさえ非力な者どもが軍になるわけでもなく、わざわざ分散してこっちに來るといふのだからな。いちいち真面目に相手するほどのことでもない」

モードレッドはどうでもいいことのように言った。

「私は少し楽しみにしておるのだがな。あの勇者アトロほどの剛の者がいるのなら、ぜひ一度手合わせ願いたいものだ」

「生粋の武人であるお前らしいな。だが今のこの世に、劍でお前の相手を出来るような奴がいるとはおもえんがな」

「世辞はすかん。では私はこれで失礼する」

そう言ってメレアガンスは部屋を出て行った。

「まったく、おもしろみのない奴だ」

そういうとモードレッドは指でキングの駒をつかんだ。

「偉大なる魔王モートか……新たな魔王はすでに生まれている」

モードレッドの指の中でキングの駒は粉々につぶされた。

「ですから、リユネット卿。これから我が国内の都市に軍隊を入れる場合は私の許可を取って
もらってからでないかと困りますな」

アヴァロン王が玉座に座ったまま、疲れ切った顔でいった。もう何度同じ言葉を繰り返した
だろうか。

「納得できません。我が神聖なイーリアスの騎士団がなぜ都市に入るのにいちいち許可を取ら
なければならぬのですか」

リユネットはほとんど喧嘩腰だ。

「ですから、それは警備上の理由でしてな。どこであれ他国の軍が都市に入るときには私の許
可が必要ということになっていおるのだ」

「えーい、その話は聞きました。もう、これ以上話しても無意味なようです。アヴァロン国王
陛下、私はこれで失礼します」

リユネットはそう言うと、アヴァロン王に頭も下げずに謁見の間を出て行った。

「やれやれ、困ったお嬢ちゃんじゃな。仕事熱心なのは結構だが、どうも少しずれておるよう
じゃ」

アヴァロン王はため息をついた。

リユネットは広い城の廊下を怒りながら歩いていた。宮中だけあって美しい廊下だ。

「まったく……アヴァロン王も噂ほどの人物ではないようです。あんなに頭が固いとは……それにあの吸血鬼、まさか仲間がいたとは……おまけにメルフィナまで吸血鬼の一味とは……あの裏切り者め」

ギリギリと歯ぎしりをさせながら独り言を呟く。

「きーっ、むかつく。どうしてこう苛つくことばかり起きるの。なにもかもあの吸血鬼のせいよ」

リュネットは側にあつた壺を手にとると思いつき壁に投げつけた。ガシャンという音がして壺は粉々に砕け散った。その破片までガンガンと踏んづけて、粉々に砕いていく。

「はあ、はあ……思い知ったかクソ吸血鬼」

近くで雑事をしていたこの城のメイドが驚いてリュネットの方を見たが、あわてて目をそらした。関わり合いにならない方がいいと思つたようだ。

「あらあら、その壺、高いんですね」

少女の声。リュネットが床の破片から目を上げると、エレインがこちらに歩いてくるところだった。

「出たな。馬鹿王女が……」

「……何か言いましたか？」

「いいえ、なにも」

「そうでしょうね。この宮中で私のことを馬鹿王女なんていう方がいたら、即座に縛り首で

す」

エレインが笑顔で言う。目は笑っていない。

「ちっ……しっかり聞こえてるんじゃないの。ガキのくせに嫌な奴ね」

「……また何か言いましたか？」

「いいえ。それでエレイン姫、私に何かご用ですか」

「ええ、リユネット殿でしたね。お父様はお渡しにならなかつたようなので、代わりに私がお持ちしました」

そう言つてエレインは紙の束を差し出す。リユネットはそれを引つたくと紙の束をめくり始めた。その手がわなわなと震え出す。

「これは……」

「ええ、請求書です。この度のキャメロン城下での騒動一件における公共物や町人の家など破壊に対する損害賠償です。なかなか結構な額ですわね。たぶん、あなたの給料じゃあ人生三回やり直しても支払うのは無理でしょうけどね」

「馬鹿らしい！ 今回のことはすべてあの吸血鬼とその一味の仕業です。我が騎士団はその吸血鬼を仕留めようとしただけのこと。請求なら吸血鬼の方に送ってください。名前はわかってるんだから。ロア・ソアです」

「ええ、本当なら私もそうしたいところなんですけど。あなた方は軍隊にもかかわらず、許可なくキャメロン城下に入ったわけですから。キャメロンの城下で治安維持の武力行為を行つて

いいのは王国守備隊か、お父様の許可を得た軍隊だけです。あなた方はその許可を得ずに町の中に入ってしまったわけなので、この度の戦闘は治安維持行動ではなくただの私闘とみなされず。私が調べた話ではあなた方の騎士団、もう少し正確に言うとなあなたが先制攻撃で魔法を放ったとか。その一撃で町の学校の一部が崩壊してしまいました。私闘では先に攻撃した方が重く罰せられます。で、考慮した結果、あなたの負担はこの額になったというわけです。あ、あとさっきの壺の分も追加しておきますね」

そういつてエレインは紙を取り出し、美しい字でサラサラと数字を書いた。

「認めない、認めないわ。あなた達、異端審問官に訴えて、吸血鬼荷担の罪で全員引っ捕らえてやる」

リユネットが首を振って叫ぶ。

「それは無理でしょうね。私の方からラヴィーンの法王様に親書を出しておきました。この度のあなたの行動を詳しく書いてあります。ついでに司祭のメルフィナ・ルーベルドラクロアと吸血鬼ロア・ソアの勇者募集に私が参加許可を出したことや彼女たちの弁護についてもね。下手をすればメルフィナ殿やあの吸血鬼ではなく、あなたが異端審問にかけられますよ」

その言葉を聞いてガクツとうなだれたリユネットだった。その肩が微妙にふるえている。

「……ふふふ……ははははは……もう我慢の限界よ。この魔女め、神の裁きを受けて地獄の業火で焼かれるがいい」

完全に切れちゃったリユネットは魔法の詠唱に入る。エレインは平然と立ったままだ。

「くらえっ、裁きのいか……」

そこでリユネットの言葉と体がぴたりと止まる。いつの間に現れたのか、エレインの後ろに立っている男が目に入ったからだ。一見するとただ立っているだけのようだが、その体からは凄まじい殺気が発せられている。

(……まずい……声一つ出すだけで斬られる……)

「裁きのイカ……がなんですか？どこの海のイカですか？」

エレインがリユネットに聞く。

「い、いや……」

リユネットはしばらく動けず固まっていたが、

「えーいい、今回はおまえ達の勝ちにしといてやるううう」

リユネットは泣きながら走り去っていった。途中で食器を運んでいたメイドとぶつかる。

食器をばらまきながら、派手にこけたリユネットだったか、立ち上がるとエレインの方に向き直り、

「馬鹿王女！これで勝ったなんて思わないことね。この借りはいずれ返してやるわ」

なんて捨て台詞を吐きながら去っていった。

「ライオネル、あの食器も後で請求額に入れておいてくださいね」

「わかりました、エレイン様」

そんなリユネットをエレインとライオネルは冷静に見つめていた。

「ガルルウ」

「はいはい、噛みつきやしませんから落ち着いてくださいね」

獣のように唸るロア。それをなだめるメルフィナ。

ネッコとアッドはそんな二人を無視して話していた。

「これからどうするんだい」

「……特に予定はないな」

呟くアッド。

「呆れるなあ。何も考えてなかったのかい」

そう言つて地図を引つ張り出すネッコ。そして地図の一点を指さす。

「えっと、今僕たちがいるのがここキヤメロン郊外だろ。ここから魔王城に行くにはもちろん直線的に向かえば一番近いんだが、敵の防衛も厳しいだろう。だから僕は右から迂回していく経路をお勧めするね。とりあえず向かうのはレオデグランス国内にある町ナハルだ。そこまで道のりなら平坦で特に障害もないだろう」

「……なるほど。どうする？」

「俺、俺は別にどこ向かってもかまわないぜ。俺、方向音痴だから行き先は任せる」

「私もお任せしますわ」

ロアとメルフィナがいう。

「じゃあ、決まりだな。僕の案で行こう」

ネッコが地図をたたんで立ち上がった。

「なあ……これのどこが平坦な道のりなんだ？」

「……さあ」

「平坦というよりジャングルですわね」

「うるさいなあ、お前達。文句を言っていないでさっさと歩けよ。仕方ないだろ。こんな森地図に載ってなかったんだから」

ネッコが怒ったように言う。もうこの暗い森に入って数時間になるが一向に森を抜け出せる気配がない。それどころかますます木々は生い茂るばかりだ。

「地図が古かったのか」

ロアが聞く。

「これは三年前に発行された地図だよ。たった三年で森ができるなんてことあるわけないじゃないか」

ネッコが馬鹿にしたようにいう。

「……なら森が書いてないのはなぜだ」

「たぶん欠陥地図なんだろうね。発行者のミスさ」

ネッコは断言する。

「それより、もうだいたいぶ歩いてますよ。まだ森を抜けないってことは迷ったんじゃあないんですか」

メルフィナが聞きにくいことをずばっと言う。

「そ、そんなことはないはずだ。方角はあつてる。このまままっすぐ歩けば、いつか森をでるはずだ」

ネッコは焦ったようにいう。

「まあ、多少迷ってもいいだろ。ずっと歩いてきたが、この森には魔物なんて出ないようだよのんびりいこうぜ」

ロアがのんびり言う。

「ふん。強い魔物がでてくれないと僕の修行にならないじゃないか。ドラゴンがでたって僕の魔法で仕留めてやる」

「おうおう、頼もしいな。だが、もう月が昇ってる。夜行性の俺はいいが、お前らはもうそろそろ野営の準備に入った方がいいじゃないか」

ロアが空を見上げていった。

「……そうするか」

アッドが言う。

その夜、4人で野営の準備をして旅の疲れからか4人はすぐに眠ってしまった。

アッドは目を開ける。頭上には月。ロアの瞳が金色にキラキラと輝いた。側を見るとアッドはすでに立ち上がっていた。

「……気づいたか」

「ああ、さっきから森が騒がしい。こりや、やばいぜ」

「……ネッコを起こせ。俺はメルフィナを起こす」

「わかった」

ネッコに駆け寄るロア。そのままネッコの肩を揺する。

「おい、起きろ」

「……うーん、なんだよ」

ネッコはまだ寝ぼけているようだ。

「ロア、気をつけろ。何かくる！」

アッドが叫ぶ。森の中から数匹のトロロークが飛び出した。身長は二メートルを越え、鉄の斧や槍をもった凶暴な魔物だ。

腰から剣を抜き、瞬く間にアッドが二匹斬り殺した。耳障りな悲鳴が森に響く。その声でネッコも完全に目を覚ます。アッドは倒れたトロロークを飛び越え、木々の奥のトロロークに向かっていく。

「うわっ、なんだこいつら」

ネッコが倒れたトロロークを見て言う。

「なんでもいいから魔法をぶっ放せ」

ロアがトロロークと組み合いながら叫んだ。ロアの鋭い爪がトロロークの喉を切り裂く。そのままトロロークの巨体を片手で投げ飛ばした。さらにそのロアに向かって三匹のトロロークが向かってきた。

「ファイヤーウォール」

ネッコが叫ぶ。ロアに向かっていた三匹のトロロークは炎の壁に包まれた。そのまま炎のかたまりになって地面に倒れる。

木々の奥からアッドが帰ってきた。マントは所々破け、その下からは血が出ている。

「大丈夫ですか。今すぐ回復魔法で……」

メルフィナが呪文の詠唱を始める。

「……あとでいい、ただのかすり傷だ。それより早くここを移動した方がいい。何匹か殺したが、まだまだいるぞ」

森の至る所でトロロークの咆吼が聞こえる。

「この森、妙だ。この森全体が魔力に包まれているような……昼間はこんなことなかったのに」

ネッコが辺りを見回して言った。

「……どうということだ？」

アッドが聞く。

「たぶん、この森自体が誰かの魔法で作られたものなんだ。それなら地図に載ってないのも説明がつく」

「そんなことできるのか？」

ロアが驚いたように言った。

「これだけ広い森を作ってしまうなんて、普通の人間には無理だ。この僕にだってね。この森作った奴はたぶん、とんでもない化け物だ」

「なら、早いとここの森から出た方がよくないか。辺り中殺気だらけだ」

ロアが森の奥をにらむ。

「もしこの森が本当に誰かのも力で作られたものなら、闇雲に歩き回っても、迷わされるだけです」

メルフィナが言った。

「……どうすればいい」

アッドが聞く。

「この森を作った術者を倒すしかないですね。この森のどこかにいるはずですよ」

「どーこだ術者！ でて来やがれ、卑怯ものが！」

ロアがトロロークをばさばさ捌きながら叫ぶ。

「……どこだと言われて出てくるバカはいない」

「だったら、探り出す魔法はないのか！」

ロアの言葉に、どうなの？と言った感じでお互いの顔を窺うネッコとメルフィナ。

「な、無いんだ……」

ネッコは考えた。

（くそっ……相手の正体さえ分かればなんとかなるかも知れないのに……こんな大規模な罠を仕掛けて冒険者を陥れる理由は何だ？この森に満ち満ちた魔力の正体は？）

ネッコが振るった杖から火炎球が放たれる。炎はトロロークの頭をはじき、そのまま後ろにいたもう一匹のトロロークの胸元で爆発する。

「……ひよっとすると……ここは食人の樹海かもしれません！」

メルフィナが叫んだ。

「食人の樹海？」

「聞いたことがあります。冒険者を捕らえて、そのエネルギーを喰らう神出鬼没の樹海が存在を……」

「……可能性は高いな」

アッドが横一文字に一閃。トロロークの体は上下真つ二つに崩れた。

「とういか、おもいっつきしそれじゃねえのか？……で、その樹海の正体はなんなんだ？」

「分かりません」

思わずつこけそうになるロア。その隙をみてすかさず武器を振りかざすトロロークだが、ロアは不安定な体勢を自ら一転、二転させ、攻撃を回避する。

「……エネルギーを喰らう、か。そのわりには大掛かりな罠だな……？」

アッドの言葉。ネッコは考えた。

（大掛かり？大掛かりなんてもんじゃやない！ 僕としたことが……冷静に考えても見ろ。どこの世界に即席で樹海を作れる魔法使いがいるっていうんだ？そう、これはきつとどこかにある本物の樹海だ。そして、僕の推測が間違っただけならば、きつとこれは……）

「……おいお前達、ちよつと思いついた。バツクアツプ任せる」

杖で空中に不思議な模様を描き、ぶつぶつと詠唱を始めるネッコ。一人が手を止めたため、急に激化した仕事量に焦る三人。

「おい、畜生！ 大魔法唱えてる暇なんかねえぞ」

ロアの言葉が耳に入っているのかいないのか、黙々と詠唱を続けるネッコ。次第に、その体

が不思議な赤いオーロラに包まれていく。

「きたきたきた……よし来たっ！ 退くんだ三人とも！」

ネッコが叫ぶのと同時に、三人はバックステップで魔法の進路を確保する。急に緩んだ攻撃に、すかさずトロロクは突っ込んでくるが……。

「赤竜！」

杖を両手で構え、ネッコは叫んだ。杖の先からほとぼしる凄まじい火炎の波動。反動の衝撃波もかなりのもので、決して大きいわけではないネッコの体が今にも吹き飛ばされそうになる。しかし、そこは彼もこの魔法を何度も練習したのだろう。重心をずらし器用にバランスをとって、なんとか全身を支えきった。

そして、その破壊力は本物だった。まるでドラゴンの吐くほのお顔負けの破壊力で、トロロク達を一瞬にして溶解し、勢いそのままに樹海をえぐって突き進む。

しかし、驚くのはそれだけではなかった。火炎の波動が通り過ぎた樹海にぽっかりと空いた穴。なんとそのすぐ向こうには、限りなく続く夜の平野が覗いていた。思わず目を疑うような光景に、三人は顔を見合わせた。

「全員、空いた穴から外に出るんだ！ すぐに新しい木々が道を塞ぐぞ！」

ネッコの言葉と同時に、彼を含めた四人は死に物狂いで駆け出した。

広大な平野のど真ん中で座り込む四人。遠くにぼっかりと樹海の姿が浮かんでいる。その全長はせいぜい数十mといったところか。とても彼らが延々と迷い込んでいた無限の樹海には見えなかった。

「ど……どういふことだ？」

肩で息をしながら、ロアはネツコに訊ねた。が、膨大な魔力を消費し、おまけに慣れない全力疾走をしたために、ネツコはうつ伏せに倒れたまま起き上がろうとはしない。

「……なるほど、そういうことね」

メルフィナが呟いた。ロアとアツドの視線がそちらに向かう。

「……あの森はあそこであって、あそこには存在しませんわ」

禅問答のようなメルフィナの言葉に困惑する二人。

「あの森はきつと空間転移魔法でしょう。どこか別の場所にある巨大な樹海の、ほんの数十mだけをあの場所に転移しているのです……きつと、その規模が術者の限界だったのでしょうか。しかし、それでもあの小さな森に踏み込んだ者は、歩けど歩けど次の風景を進む方向に転移させられて、延々と樹海を彷徨いつづけることになります」

頭にクエスチョンマークを弾き出しているロア。

「……例えば大きさが数十mの森でも、迷い込んだ者にはその向こうは見渡せない。風景を線路のようにつぎ足される限り、いくら前に進もうが樹海は無限にでもつづいているように錯覚する。つまりそういうわけだな？」

アツドの言葉にメルフィナが頷く。

「だから、それを見抜いたネツコが樹海に穴を空けて、私たちを外へと導いた。出口さえ分かれば、そこまで走り抜けてしまえば済む話ですからね。どこかの空間を丸々こちらへ転移させるなんて、そう容易ではありません。こちらが恐る恐る進んでいる間ならともかく、人の走る速度ほど早くは風景を継げ足せなかつたみたいね」

メルティアの説明をうけて、ぼりぼりと頭を書く口ア。

「よくわからねえな。そのメカニズムはともかく、そんな回りくどいことをする理由がよくわからない。あの樹海は術者が人間のエネルギーを吸収させるために用意したんだっただよな？ だったら、せつかく吸収したエネルギーも、そんな大量の魔力を使っちゃったらパーじゃないか？」

「……きつとなにか、別の目的があるんだ」

半死人のネツコが俯けのまま、うめくように言った。

「別の目的って……なんだそれ？」

「僕が知るもんか……」

——魔界に広がる巨大な樹海……通称、暗黒の大森林。その何処かにある洞窟に、使徒アルアルパツゾは身を潜めていた。

本来なら人間で言うところの二十代ぐらいの、若くて健康的な肉体を持つアルアルパッツだったが、いまはまるで老人のように無残に衰弱しきっている。石畳の上に肢体を放り出し、生きているのか死んでいるのかすら分からないガイコツのような顔。ゼエゼエという苦しい呼吸だけが、彼のか細い生命を知らしめていた。

(逃げられた、か)

心の中で呟くアルアルパッツ。

(ヴァンパイアにハーフェルフ、おまけにイーリアスの司祭と才気あふれる魔法使いが四人まとめてあの樹海に迷い込んだときは、久々のフルコースだと思ったんだがな……逃げられるとは、我ながら情けない)

アルアルパッツは震える右手を渾身の力をこめて持ち上げるが、すぐに力尽きて地面に頼りなく落ちた。

(まだ右手も満足にあがらん……いったいいつになれば俺の復讐は達成できるのだ?)

魔王亡き今、新しい魔王の登場を望む新魔王派……その中でも、自らが新たな魔王になりかわろうと画策する野心家アルアルパッツ。対して、あくまでモートトを信仰し、その復活を目論む旧魔王派のモードレッド。およそ百年前に両者はぶつかり、圧倒的な力でモードレッドがアルアルパッツをねじ伏せた。全身ズタボロになりながらこの洞窟へと逃げ込んだアルアルパッツだったが、そのダメージは悠久の年月の休養を要するものであった。

(おのれモードレッドめ！この恨みを晴らす、その一心だけで俺は生きている。寝たきりで

腐った背中に石が食い込む苦痛、毎夜襲ってくる身を切るような洞窟の寒さ、体を這う虫、気が狂うような年月……モードレッドめ！ この恨みを晴らすまでは、死んでも死にきれん！ もっとエネルギーが必要だ。決してそこいらのトロロークなどで癒えるダメージではない。そう、人間だ。人間のエネルギーがいる。脂の乗った人間やエルフ、ヴァンパイアのエネルギーがほしい！ 魔力は余っているのだ、まだまだこの樹海転移の罫で、新鮮なエネルギーを搾り喰ってやる。生きるためにはこのアルアルパツゾ、ハイエナだろうがハエトリソウだろうが、なんにだってなってやろう！

復讐という名のドス黒い執念。それだけが、この半死の使徒の肉体と神経をささえている悲しい希望だった。

樹海の罨を抜け、一向はようやくナハルの町に辿り着いた。辺りは日が沈みかけ、少し薄暗くなってきた。四人は適当な宿を探し、そこで休息をとることにした。宿を取るには時間が少し早かったが、アッドとロアは町を見て回る気はない、メルフィナはナハルの町のことを少し知っていたのもあるが、何よりネッコの体力が限界に達していた。

「それじゃあ、僕は先に寝るから……」

ネッコがげっそりとした顔でそう言い、寝室の方へと上がっていった。

「それじゃあ、私達は何か食べましょうか」

メルフィナのその言葉に、二人はためらいもなく同意した。

「なあ、メルフィナさんよ、あんた何故俺たちと一緒にきたんだ？ いや、その前に、なんで司祭が勇者募集に参加なんかしたんだよ？」

目の前の食事を口にしなから、ロアはメルフィナに聞いた。

「参加した理由についてはお話できません。あなた方と来たのは、ロア君がいたからかしら？」

「俺を殺す機会でも狙ってるのか？」

「いいえ、あなたが『妙なマネ』さえしなければ、殺したりしませんよ」

メルフィナは、ニコニコしながらそう言い放った。その言葉に少し気構えるロア。

「冗談です」

「……あなたが言うと、冗談に聞こえんな」

アツドがさりげなく言った。

「魔王モートの復活の噂、魔王城に集まった数万の魔物達、生きていた十三使徒……実際、あそこに集まったごろつき達や、ほんの少し有名な戦士達にどうこうできる相手ではありません。あれなら神聖騎士団でも出した方が、まだマシかもしれません」

「ふーん……それで実際に俺達の実力を見てついでにきたって事か。しかし、

神聖騎士団『でも』とは、大した言い草だねえ。俺達、まだあなたの実力を見てないけど、そこまでできるわけ？」

メルフィナの言葉に、食って掛かるロア。

「あなた達が束になってもかかいませんわ」

「なにい!?!」

「冗談ですってば」

ロアの反応に、メルフィナは笑いながらそう言った。

「私とてイーリアスの司祭のはしくれ、足手まといにはなりませんわ。それに、私の実力は、

そのうち嫌でもお見せする事になるでしょうし……」

「そのうちねえ……」

「……まあ、回復魔法の使えるあんたは重宝だし、いてくれるのに越した事はないけどな」
アツドの言葉でまとめられたように、三人はその日の食事を終えた。

夜もふけた頃、メルフィナはふと目を覚ました。窓からしばらくの間、外をじっと見つめていたが、ベッドから出て、寝室を後にする。

(眠れないですわね……何か飲み物でもいただきますか……)

そう思い、メルフィナは階段を降りていく。宿の一階は酒場になっていたので、そこで何か飲もうかと考えたのだ。

メルフィナが酒場に降りると、そこにはロアが一人、何をするわけでもなく座っていた。

「やはり吸血鬼というのは、夜は眠れないものですか？」

そう言いながら、メルフィナはロアの対面の椅子に腰を掛ける。

「そりやそうさ。いくら昼間に寝てなかつても、夜には目が冴えちまうんだよ。まあ、そんな日は次の朝、とんでもない睡魔に襲われるんだけどな」

鼻で笑いながらロアはそう言った。

「じゃあ、明日は少し出発を遅らせた方がいいですね」

メルフィナの言葉に、少し戸惑うロア。

「なに氣遣ってんだよ」

「あら、たった数日とは言え、仲間じゃないですか。それに……」

言いかけて、二階の方を見上げるメルフィナ。

「あの様子だと、ネッコ君もお昼過ぎまで寝てそうな感じなので……ものついでです」

「あんた、意外と言いいにくいことズバツと言うよねえ」

ロアが呆れた顔でメルフィナに言った。しばらく二人の間に沈黙が訪れる。

「なあ……」

先に口を開いたのはロアだった。

「飯の時言ったあれ、半分本気なんじゃないのか？」

「あら、なんでしたっけ？」

「束になってもかなわないって言っただろ？大体、あんた本当は人間じゃないだろ。なんとなくわかるんだよね。一体なんなのかまではわかんないけどよお、少なくとも、人間や魔族じゃねえよな。あんた一体何者なんだ？」

「……今はお答えできません」

「そのうちって言うのは、そういう意味だったのかねえ。まあいいや、俺だってヴァンパイアだしなあ」

「大丈夫、本当に冗談ですわ。ただ、今の私達では十三使徒の足元にも及ばないことは確かでしょう」

「じゃあ、なんで俺達を選んだわけ？」

「あなた達には資質があります。強くなる資質が。それが何かはわかりません。でも、あなたも、ネッコ君も、アツドさんも、まだまだ強くなれるはずですよ。私にはそんな気がします…」

「資質ねえ……」

メルフィナの言葉に、ロアは黙って考え込んでいた。

（そう、私の勘に狂いがなければ……）

四人全員が宿の一階にある食堂に集まったのはもう日が頂上まで登り、降り始めた自国であつた。まっさきに起きたのはメルフィナであつた。その後、すぐにアッドが食堂に降りてきて二人は朝食を取つた。ロアとネッコはそれからたつぷり二時間後くらいに起きてきた。

二人が眠っている間に、アッドはメルフィナに街での買い物に付き合わされていた。

「地図はいますわよね」

「……ああ」

「ティーポットはどうでしょう、私は必要だと思つたのですが？」

「……いらん」

「寝袋はいますわよね、これから野宿もあるでしょうし」

「……俺はいらぬ。君だけ買うといい」

「あら、メルとお呼び下さいな、アッドさん。そんなにくすぐったい言い方やめてください」
「そうメルは照れたそぶりを見せる。」

「……」

アッドはため息をつきたいのをなんとか堪えた。

いらぬものの購入を幾度か阻止した後、

「……そろそろ奴らも起きてるだろ」

「そうですね。では一旦戻りましょうか」

「……ふう」

やっと開放されると思うと、アッドは自然と息をついた。

宿に戻った二人が食堂へ行くと、ネッコとロアが言い合っていた。

「だから、東のダルフェンディアを経由して、カーノスメルテに入るルートがいいだろ」

「それじゃ、敵がいっぱいだろ！ 西に向かっていった方が、魔王軍と戦うのが遅くていい

じゃないか」

「それじゃ僕の修行にならないだろ。敵とは戦った方がいいんだよ」

「どうやら次からのルートに行くかで二人は言い争っているようだった。」

「あらあら、どうなさったんですか、お二方とも」

「ああ、ちょうどいいところに来たよ、お前達、この町を出たら東に行った方がいいと思うだろ？」

「だから西。西がいいの。西には楽しいこと一杯」

「あらあら、落ち着いて下さい二人とも」

「……」

二人をなだめるメル、呆れるだけのアッド。

しばらく、その言い合いとメルのだだめる声が続き、ネッコとロアは肩で息をしながらようやく少し大人しくなった。

「……で？」

大人しくなった二人を見据え、アッドが口を開いた。

二人が同時に口を開こうとするのを手で止め、「……ネッコ」とアッドは呟いた。

「この町を出てからのルートだよ。僕は東周りに北上するのを提案する。東のダルフェンディアに入って北上し、カーノスマルテに入るのがいいんだ。そのままレオデグランヌを出て魔法国サンダルークに行く」

そうネッコは一息にまくし立てた。

「ただ、途中精霊の樹海と呼ばれる巨大な森を通らないといけませんわね」

そうメルが付け加えた。

「それで、ロアさんはどう思ってたっしやるんですか？」

「西。西に行こう、なんだかい感じがするんだ。西は楽しいって、敵とも会いにくいし」

「西には商業都市エルがありますわね。その先にはシエルト山脈がありますね。それを越えたとパッセ国がありますわ」

「山脈？そんなにしんどいところには行きたくないね」

「……メルフィナはどっちがいいと思う」

「メルです。メル」

「……メルは」

「そうですね。私は西と東の真ん中、ミンシアを通過するのがいいと思いますわ。レオデグランスを最短で通過して砂漠を横断する行程です」

「……意見が別れたな」

三人は顔を見合わせ、アッドに一齐に振り向いて

「アッドはどれがいいんだ」と言いたいばかりの表情を浮かべる。

「……俺は、どうでもいい」

三人はその事を聞くなり落胆の表情を浮かべ、またも言い争いを始める。

「……」

アッドは同じテーブルで他人の振りをしていた。

彼ら四人のいるナハルから遙か北。

魔王軍最前線。

城壁の上で、二人の騎士が下を眺めている。

「くそう」

片方の騎士がそう吐き捨てる。この影は若い女性であった。

「どうなさいますか、オートニー將軍」

「撤退はできんだ、ミーシャ」

ミーシャの言葉に、壮年の將軍オートニーはそう答えた。

「今ここで我らノーススターナイツが引いて祖国の地を汚させる訳にはいかんだ」

「わかつてはおります。しかし、我らももう少数、このままでは全滅は必至です」

ミーシャの言葉に、オートニーは軽く頷く。

「わかつておる。ミーシャ、よく聞け、若い兵士を連れて祖国を、我らが民を守るのだ」

「オートニー將軍！ そんな、私も残ります」

「ミーシャ、わかつてくれ。お前はまだ若い。そして力もある。我らが民を逃がしてやってくる」

オートニーはミーシャの肩を掴み、そう言った。

「しかし……」

ミーシャは目の端に涙を浮かべている。

「お前とは長いつき合いであった。お前が幼少の頃から私はお前の父に頼まれ剣を教えてきた。私の剣技を後世に残してくれ、それはミーシャ、お前にしか頼めないことだ」

「オートニー……」

「私の愛しのミーシャよ、どうか生き残っておくれ」

二人は堅く抱き合い最後の別れを惜しんだ。

「……オートニー、いえ、オートニー將軍、御武運を」

そう敬礼し、ミーシャは目から雫を流しながらオートニーの元を去った。

「ミーシャ、すまない」

ミーシャの引き連れた少人数の騎士達を見ながらオートニーは呟いた。

そして、

「ノーススターナイツ、特攻をかける！」

オートニーは砦の中庭に集まっている残りの騎士達を激励する。

「我らが思いは祖国の民を救うであろう！ 我らの誇りは祖国の地を守るであろう！」

「おおおおおおおー」

オートニーの激励に、騎士達は自分を奮い立たせるように雄叫びを上げた。

「みなのもの、共に祖国の礎となろうぞ！」

騎士達が一斉に武器を天にかざす。

「われらにイーリアスのご加護があらんことを」

そして、騎士達は馬に跨り、城門の前を睨む、

「開ける！」

オートニーが叫ぶ。

城門も開き切らぬ内に聞える魔物どもの咆吼。

「ゆくぞ、ノーススターナイツ、突撃！」

魔物の咆吼を打ち消すかのように叫んだ騎士達が魔物どもに向かって駆けだしていく。それ

は銀と茶の川のようであった。

遠く離れた丘、騎士達の咆吼を聞いたミーシャ達は皆の方向へ、ただ涙しながら敬礼するの
であった。

負傷した第十六神聖騎士団を率いて聖都ラヴィーンに戻ったリュネットは嫌々上層部に報告をすませ、ふたたび出撃の準備を始めていた。そして出発の朝、リュネットは礼拝堂で跪き、神に祈りを捧げていた。

（慈悲深き神イーリアスよ。再び旅立つ我らに祝福をお与えください。そして、世界を正義の光でお包みください。間違ってもあなた様の慈悲が吸血鬼どもに届きませんよう。とくにあのロア・ソロには地獄の業火をお与えください）

「これこれ、リュネット。ちよつと、こっちに來なさい」

祈りを終え、立ち上がったリュネットに一人の白髪で腰の曲がった老人が声をかける。

「これは司教様。何かご用ですか」

声をかけた老人はハーナン司教。リュネットにとつてのかつての恩人である。

「なーに、おまえさんがまた吸血鬼討伐に出ると聞いてな。つい先日聖都に戻ってきたばかりなのに。もう少しゆっくりとしていけんのか」

「いえ、休んでいる時間などありません。私は神にこの身を捧げた身。正義と正しい信仰のため、心血を注ぐ所存です」

「まったく、おまえは真面目すぎる。それにしてもまだあのロアを追っておるのか。おまえが九歳の時からだから、かれこれ十年の因縁か。おまえさんもしつこいのお」

「はい、奴めゴキブリのように素速くしぶとく、なかなか捕まりません。あと少しまでは追いつめるのですが。十年前あいつに受けた人生最大の屈辱、今度こそ晴らして見せます」

「……いいかげん、ロアを追うのはやめたらどうじゃ。おまえさんの気持ちもわからんではないが……」

「……それはできません」

リユネットは暗い顔で答える。そして、思い出す。悪夢のような過去を……。

リユネットはレオデグランスの中流貴族の娘として生まれた。リユネットの父の領地は都市からも国境からも離れた平和な田舎で、彼女は幼年時代をそこで楽しく過ごしたことをかすかに覚えている。

しかし、リユネット九歳の時、悪夢のような出来事が起こった。一人の吸血鬼が城に現れたのだ。その吸血鬼はたった一晩で城下の住民と城にいる兵士達、そしてリユネットの家族を皆殺しにしてしまった。ただ彼女だけが、城の秘密の通路から城下に抜け出した。だが、城下には血を吸われグールと化した住民達が血を求めてさまよっていた。どうしていいかもわからず、泣きながら立ちつくすリユネット。その時、彼女の前に一人の若い男が現れた。リユネットは男に助けられ城下の町から抜け出すことができた。そのまま、行く当てのなかったリユネットは男に連れられ旅をした。最初は見知らぬ男にどこに連れて行かれるかもわからず、ただリユ

ネットは泣いてばかりいた。男はリユネットの手を引き、リユネットが疲れたといえれば彼女を抱き上げ、色々な都市をリユネットに見せて歩いた。それがどこの町だったか幼なかつたリユネットは覚えていない。サーカス、パレード、花火、広大な海に様々な古代の遺跡。田舎の領主の娘だつたりリユネットにとつてそれは見たこともないようなものばかりだつた。いつしか、リユネットは泣くことを止め、笑つていた。

そして最後に男とリユネットは聖都ラヴィーンにたどり着いた。男の目的地はここだつたのだ。男はリユネットをイーリアスの寺院に預け、そのまま立ち去つた。

月日は流れ、リユネットは十四歳になつていた。寺院で育てられた彼女は信仰深いイーリアス教の信者となつていた。しかし、リユネットは普通の僧としての人生よりも神聖騎士団の入隊を希望した。幼い頃の悪夢、家族を殺した吸血鬼という種族をこの世界から根絶やしにするために。やがて、リユネットはその非凡な魔法の才能で神聖騎士団の一団長となつた。

そんな時だつた、かつて吸血鬼から助けてくれたあの男の名前をリユネットが町の噂で再び耳にしたのは。遺跡荒らしの吸血鬼ロア。トレージャーハンターとしてアンダーグラウンドでそこそこ有名ならしい。

ロア・ソア。かつてリユネットを助けてくれた男も吸血鬼だつた。リユネットの中で吸血鬼に家族が殺されていく悪夢と、ロアと旅した楽しかった思い出が交錯していく。

それからだつた。リユネットがロアを追いかけ始めたのは。

「あのロアという吸血鬼がおまえさんを連れてきたときは驚いたよ。儂もずいぶん長いこと生

きてきたが、吸血鬼が白昼堂々と幼い少女を連れて、この聖都に入って来たなど聞いたこともない。凶太いというのか、楽天家というのか。信者達に吸血鬼だとばれたら、その場でリンチにあつて殺されておつたらう。それで儂に面と向かつてこの子を預かってくれという。僧侶に頼み事をする吸血鬼も儂は初めて見たわ」

ハーナン司教は懐かしそうに言った。

「私にとつては人生最大の恥辱です。汚れた吸血鬼と旅をして、よりもよつてこの聖都に足を踏み入れるとは。神に申し訳がありません」

リユネットは吐き捨てるように言う。

「そう言うな。おまえにとつては命の恩人じゃろうが」

ハーナンは笑つて言った。

「吸血鬼に命を助けられるぐらいなら、私は喜んで主の元へいける死を選びます。司教様、もうあの吸血鬼の話はよしてくださいます。あの吸血鬼の名前を聞くだけでイライラしてきます。では、わたしはこれで失礼します。まだ、出発の準備の方も残つておりますので」

そういうと忙しそうにリユネットは礼拝堂から立ち去つた。

そのリユネットをハーナン司教は温かい目で見つめていた。

「まつたたく……あの子はしょうがないのお。体は大きくなつたが、考えていることは九歳の頃からまつたたくかわつたらんわ。どうしてそうも意固地になるのかのお。まあ、かわいさ余つて憎さ百倍とも言うからなあ。ロアとかいう吸血鬼も大変じゃろうな」

「へっくしゅん……」

ロアがくしゅみやみをする。ここは一階の食堂、四人はまだ行き先を決めかねていた。

「あら、ロアさん。風邪ですか？」

メルフィナが聞く。

「いや、そんなはずは……」

ロアが鼻をすすって言う。

「馬鹿だなあ。馬鹿が風邪引くわけじゃないじゃないか」

そんなロアをみて、ネツコが言った。

「だよなあ。俺も風邪なんかひいた覚えがない。誰か俺の噂でもしてんのかな」

ロアが首をかしげる。

「お前、一つ聞いていいか？」

ネツコが言う。

「うん？」

「その首から提げてる銀の首飾り、明らかにお前に似合っていないよ」

「そうかあ？」

ロアが自分の首飾りを手にとって言う。

「うん。だいたいそのデザイン女性ものだし。それにその首飾りの先についてる飾りはイーリアス教の紋章だろ。どこの世界にイーリアス教の紋章下げた吸血鬼がいるんだよ。似合ってるどころか異常だよ」

「ははは、あんまり細かいこと気にするなよ」

ロアが笑う。

「ぜんぜん、細かくない！ 何でお前はそんなにいい加減なんだ」

ネツコが叫ぶ。その横ではメルフィナが、

「ロアさん、イーリアス教に改宗ですか。いい心がけです」

なんて言ってる。

「これはな、十年ぐらい前にある少女にもらったんだ。助けてくれたお礼に、別れるときにお守りとしてくれた」

「……助けてくれたお礼？」

それまで黙っていたアッドがロアに聞く。

「ああ。俺ってちよっとした因縁で昔ある吸血鬼追ってたんだけど。ある時、その吸血鬼がある城を襲った。ヨークってところだ」

「聞いたことあります。『ヨークの赤』って呼ばれてる事件でしょ。なんでもたった一人の吸血鬼が一晚で城と城下の人間すべて殺してしまったとか。ある者は血を吸われ、またある者は体をバラバラに切り裂かれて殺された。城中血の海で、夜が明けた時には白いはずの城が血で

真つ赤に染まっていたとか。確かまだ犯人は特定されてもいないはずだ」

「ああ。俺がその吸血鬼を追ってヨークの城下に着いた時には、もうその吸血鬼は立ち去った後だったけどな。村中ひどい有様だった。で、そんな村でたった一人の生存者の女の子見つけたんだ。初めは泣いてばかりでどうしようもなかったけどな。やがて、その子、ラヴィーンに行きたいって言い出したんだ。聖都ラヴィーンに行けば神様が助けてくれるって、お母様が言ってただってさ。よりもよって聖都ラヴィーンだぜ。俺が世界で一番近づきたくない町だ。でもまあ、あんまりその子が可哀想なんで、ヨークからラヴィーンまで連れて旅した。で、ラヴィーンに着いてその子を寺院に預けるときに、その子が自分の首にしていたこの銀の首飾りをくれた。あなたにイーリアスの祝福がありますようにだってさ。またいつか会いに来たくださいとも言ってたな」

「へえ、お前もたまにはいい事するんだね。で、それからその女の子に会いに行ったの？」

「いや、行ってないなあー。いつかは行こうと思ってたら、いつの間にかもう十年もたってた」

のんきに言うロア。

「今度会いに行ってみたら。結構美人になってるかも」

ネッコが言う。

「それは無理だな」

「なんで？」

ネッコが怪訝そうに聞く。

「だって、俺もうその子の顔も名前も覚えてないからな。だいたい、俺が十年前の出来事を覚えてるって事自体でもう奇跡みたいなもんだ。ほとんどの人の名前なんて一年もたたないうちに忘れてしまうぜ、あはは」

笑うロア。

「すごい脳味噌してるんだな……今度頭の中開いてみたいよ……」

ネッコが疲れたように言った。

「うーん、しかし今思うと可愛い子だった気がするなあ。純粹で無邪気で……きっと今頃天使のような子になっているだろう」

「……ってそんな話をしているんじゃないんだよ。これからどのルートで行くかの話をしてるんだ。お前の話のせいでえらく時間をくったよ」

ネッコが机をたたいて怒鳴る。

「おまえが聞いてきたんじゃないか。それに向かうのは西ルートって決まらなかったっけ？」

「決まってる。僕たちは東に行くんだ」

「……」

まとまりのない四人は未だに行き先を決められずにいた。

「だったら、例えば西から行くでしょう！」

勢いよく世界地図を広げるネツコ。アッドのグラスがごとごとと傾き、ミルクがこぼれそうになる。慌てずにゆっくりとそれを置きなおすアッド。

「確かに、商業都市シエルは良い町だ。きつと町は活気に満ち、おいしい食べ物や素晴らしい魔法書が沢山あるだろう。あそこには、なんだってあるんだからな。僕もいつかは行ってみたい場所だよ。しかし！」

シエルの遥か北、レオデグランスの北西の国境にある山脈を指差すネツコ。

「ここがマズい。レオデグランス一番の敵国、パッセが国境に厳重な警戒を敷いているシエルト山脈だ。ここがあるからレオデグランスとパッセは長年決着がつかないんだよ。たしかに、僕達四人だけだったら軍隊がそろそろ歩くのよりはマシだけど、やつのことで国境を超えたとして、辿り着くのは超国家主義国パッセだよ？異民族……それもレオデグランスから来たと分かれば、即コレさ」

首をちよん切るマネをするネツコ。

「んなもん、バレるかねえ」

「あの国はパッセ先住民族の優良性を説いている。エルフやヴァンパイアなんてもつての他
xvi」

「……たしかに、西は賛成できないな」

アッドが言った。

「じゃ、真ん中はどうなんだ？」

ロアは頭の後ろに両手を組みながら、ネッコに訊ねた。

「私が答えましょう」

そう言うのとメルフィナは、自らの細い指を地図上のナハルに当て、ゆっくり北上させていく。
「ナハルを北上し、ミンシアの町。そこからまた北上して、砂漠に入る。そのままペルセン王国をくぐり抜けて、まっすぐ魔界に突入する最短ルートです。ペルセンはパッセと違い、一介の旅人を国の違いから襲うようなマネはしません」

「だが素人が砂漠を抜けるのは危険だ。ラクダもいるし」

ネッコがすかさず反論した。

「それなら大丈夫かもな。ピラミッドは俺の職場みたいなもんだから、砂漠なんてしょっちゅう行ってるぜ。水先案内ぐらいならなんとかできそうだ」

トレジャーハンター・ロアが言った。

「……ネッコのルートはどうなんだ？」

「東のルートだね。中立国であり魔法大国であるサンダルークを経由して、魔界へと向かう

ルートだ。問題とさええば、途中にある精霊の樹海だろう」

ネッコの言葉を聞き、少し不服そうな顔でメルフィナが続けた。

「精霊の樹海……人間界において最大の樹海であり、未だ様々な種類の人間、亜人間がそれぞれの部落を作って生息している場所……エルフ、ドワーフ、コロボックル、オーガ、オーク、ゴブリン、ラビトニアンなど……人間にとつて友好な者、敵対意識を持つ者、様々です。私としてはあまり……」

「なんでだ？ けっこう面白そうなところじゃねえか」

ロアが何の気なしに言う。

「樹海は山や砂漠よりずっと恐ろしい場所です。毎年おびただしい数の冒険者が行方不明になっっています。一度迷えば探しようがありませんから……先刻の食人の樹海のように、大魔法を放って脱出できるような場所ではありませんよ」

「なんだ、メルフィナ。えらく反対だな」

「このパーティで樹海に入るのが恐ろしいんです。協調性なんて、あったもんじゃありませんから！」

メルフィナの言葉に、思わず顔を見合わせる三人。

「確かに、魔界に向かって砂漠を直接横断するのは大きな危険を伴います。ですから、砂漠をある程度進んでそこから東にそれ、サンダルークに入ってまた魔界を目指すルート……私はそれを勧めますわ。いかがです？」

「うーん。ま、なんでもいいや」

だんだん適当な返事を返すようになってきたロア。

「ふん、砂漠なんて退屈さ!」

ネッコはそう言うのと席を立ち、さっさと宿屋の玄関へと歩いていった。

「ちよつと、どこへ行くのですか?」

「この町の散策だよ」

俺も、と言いながらロアも席を立つ。メルフィナは大きな溜息をついてがっくりとうな垂れた。

「決めてから出て行ってよ、もう……」

窓際に肘をかけ、ぼんやりと外を眺めるアッド。

「……樹海も悪く無いかもしれないな」

アッドがそう呟くのをきき、メルフィナは不思議そうな顔をした。

樹海に存在するエルフの部落、そこでなら、自分のことを知る手がかりが見つかるだろうか? そんな淡い期待を一人胸に秘めるアッドであった。

「おっかしいな……あいつどこに行きやがったんだ?」

人、人、人の雑踏を掻き分け進むロア。彼は一緒だったはずのネッコとはぐれてしまい、これこれ二時間あまりもナハルの町をさまよい歩いていた。

ロアは一軒の古書を扱う本屋に辿り着いた。ネツコを探し、今日だけで三回はここに来ていた。

「ここまででは確かにあいつと一緒にいたんだよな。いったいどこではぐれちまったんだか……あーったく！　ちよいとそこのオッサン！」

痺れを切らしたロアは本屋から出てきた一人の魔法使いに声をかけた。オーソドックスな真っ黒のローブが頭からつま先まですっぽりと包んでおり、はっきりと顔は見えなかったが、覗く口元から判断するに中年の男性であることは間違いないさそうだった。

「あのさ、こんぐらいの身長で、あんたと同じような真っ黒のローブと黒い三角帽かぶった若い魔法使い見なかったか？　髪も瞳も黒で、多少目つきの悪いやつなんだけど」

ロアは魔法使いに近づくと、相手の禍々しいオーラに思わず身震いした。まるで暗黒の煙と共に漂う死と憎しみの香り。それは、ロアには覚えのある香りだった。

（これは……間違いない、デーモンの香りだ！　しかしヘンだな、完全なデーモンでもなければ、このオッサンはやはりどうみても人間……）

「……ヴァンパイア、か」

デーモンの香りがする魔法使いの言葉。ロアは体こそ微動だにしないものの、全身の神経を張り巡らせて警戒した。

「……」

「……」

沈黙の裏で渦巻く見えない陽炎。片やデーモン、片やヴァンパイア、そのどちらもが魔を母とする邪悪で危険な血。その血から発せられる闇のオーラが、あたりにピリピリとした緊張感を漂わせていた。しかし、この静かな競り合いは、道行く人々のほとんどがその異質さに気がつかない。

……やがて、魔法使いは何事も無かったかのように踵を返し、雑踏に紛れ込んで消えていった。途端に切れる緊張感。その後ろ姿を見ながらロアは思った。

(……ただもんじゃねえな、あのオツサン……ネッコもなかなかの魔法使いだが、あのオツサンには勝てないだろうよ。なんて言うか、桁が違う)

ロアは一度大きな溜息をつき、近くの路地裏にしゃがみ込んだ。そして一本のタバコに火をつける。ゆっくりと立ち上がる白い煙。

(しかし、とんでもない奴がいるもんだぜ……デーモンが人間に化けているのか？それとも……あれも人間の一つの形だったのか？興味はあるが……)

建物と建物の隙間から覗く空に向かい、大きく煙を吐くロア。その目つきはいつに無く険しいものだった。

一方、ネッコは町の外れにある王立自然公園に迷い込んでいた。公園、と言ってもかなりの広さで、その森林部分に迷い込んだネッコは右も左も分からずに困り果てている。

「なんなんだこの地図……三件先にあるはずの古書店が、どうして王立自然公園になるんだ？

まったく……」

自らの方向音痴を柵に上げ、地図に当たるネッコ。しかしいくら自らを正当化しても、八方に広がる森からは出られない。

「……本当に夜までには出ないと……こんなところで一夜を過ごすのはごめんだからな、僕
は」

しかし、歩きつかれたのか昨日の疲労がたたったのか、ネッコは足を止めてしまうと一本の木の根元にもたれかかった。小さい溜息をもらす。

(……静かだな)

木々の間から差し込む木漏れ日が、地面にたまった落ち葉とで織り成す陰影。涼しくそよぐ風が疲れきった肌を撫でる度に、今度は枝葉のざわめきが鼓膜を通じてネッコの胸の奥を撫でていった。その静穏とした雰囲気、ネッコは自分の故郷にある教会と、そこから聞こえる処女聖歌隊の歌声を思い出した……やがて引きずられるように自分の生まれ育った町の記憶が引き起こされる。大好きだったパン屋、足しげく通った魔法書店、噴水のある公園、名声とは裏腹にボロボロだった我が家……家族のように見知った人々の顔、物心ついたときからの悪友、自分の愛の告白を門前払いにした初恋の赤毛の少女、偉大なる祖父ルドヴィヒ、宮廷魔法使いの父リジョ……こんなとき寂しくなるのは、自分の母親の顔がでてこないことだった。ネッコの母親は、ネッコを産んだ直後に夫と赤ん坊を置いて家を出て行ったという。

(母さん……か。こうやって旅をしていたら、いつかどこかで会えるかな?……無理だろうな。

顔も知らないんだ。会った所で、僕にとつてはどうせ他人だよ)

そんな風に割り切ろうとすると、ますます寂しい気持ちになる。考えるのに疲れたネッコは、俯いて目をつむり、いま一度自分の故郷を思い浮かべてみた。けれど、例の聖歌隊の歌声はもう聞こえなかった。

パキン、という枝の折れる音があたりに響き渡る。ネッコは慌てて顔を上げた。

そこには、いつの間にも目の前まで来ていたのだろうか？オーソドックスな真つ黒のローブを頭からつま先まですっぽりと被った一五、六ぐらいの少女が、ネッコの前に立っていた。フードの奥から覗く冷たい目つきに、思わず身震いする。まるで、蛇かなにかに睨まれたような気分だった。

次にネッコは、少女から漂う異質な空気を感じ取った。デーモンとも人間とも魔獣ともつかない、それらがイビツに混ざり合ったたまらなく不愉快なオーラ。魔術の知識に長けているネッコは、それが何を意味するのかを理解した。

(……この子、禁術を……このオーラは、きつと悪魔や人外との生体融合をしているからだ)

禁術……それは、悪魔や魔獣を利用して行う、本来人間には扱いて得ない魔術の総称である。あまりにも禍々しく愚かな魔術の一つとして、約三百年前に勇者アトロが絶対禁止を唱えた。しかしその力の凄まじさ故に、例え己の肉体の死期を早めようとも手を出そうとする魔法使いが後を絶たない。

(禁術……ゼム・ロック……!)

若いころから大魔法使いとしての素質を爆発させ、常に国の英雄として活躍した祖父ルドヴィヒ。だが、その栄光の裏で彼を何度も死の淵に追いやろうとした、永遠のライバルがいることはあまり知られていない。その名をゼム・ロックという。彼はまだ若いころに魔の魅力にとりつかれて、その研究に身を投じ、独自の手法をもって禁術の新境地を築いた。悪魔との生体融合である。

そんなゼムは一人の女性に心から傾倒していた。名はマリア・バラード・ヴァンシュタイン。リジエの妻であり、ルドヴィヒの義娘である。ゼムはマリアを賭けて幾度となくルドヴィヒに決闘を挑んだ。お互いの命のまだあることが不思議なまでの死闘を毎回のように演じ、ついにゼムがルドヴィヒの片目を奪ったときには、ゼムの片腕と両足はどうの昔に借り物の肉体となっていた。ルドヴィヒの魔法に焼かれた肉体を、デーモンのそれと取り替えたのである。

執念。一人の男をここまで狂わせる執念とは、一体なんであるうか？マリアへの愛？もちろん、それもあつた。しかし、ゼムをここまで狂わせたのは、むしろルドヴィヒへの嫉妬なのかもしれない。魔法使いとしてほとんど同じ実力を持ちながら、片や輝ける栄光の道を歩んだルドヴィヒ、片や危険な魔術に全てをささげながらも他人には蔑まれ、人生のどん底を歩んできたゼム。マリアへの愛を発端に、ゼムのぐずついたやり場の無い憎しみがルドヴィヒに対して爆発したのかもしれない。

勝利こそ収めていたものの、ルドヴィヒは空恐ろしくなった。自分の四肢を失ってなお何度も何度も立ち向かってくるゼムのその常軌を逸した感情に、人間というものが信じられなく

なっていた。度重なる死闘の末に自らの体を失ったゼムだったが、ルドヴィヒに与えた心の傷はそれにも劣らない程に深い。対価は同じか、それ以上であった。やがて偉大なる魔法使いルドヴィヒは他人に対して心を閉ざし、人里離れた塔に身を窶して自らの研究に没頭するようになってしまった。

その全てを聞き知るネッコは、禁術に対して並々ならぬ憎しみを持っていった。と、同時に、心のどこかでその力に憧れていた。超人のような魔力をもった、あのルドヴィヒと対等に渡り合える力……ルドヴィヒを、賢者サンダルクを除いた誰よりも尊敬しているネッコにとって「興味を持つな」と言う方が無理な話である

しかし、ネッコが目の前の少女に向けた感情はそのどちらでもない。彼の心にあつたのは、紛れも無く憐れみであった。ゼムが開発した生体融合は既存の禁術に比べ、更に相当の危険を要する魔術であり、例え成功したとしてもその寿命は極端に縮んでしまう。この少女の命も、もってせいぜい十代の間だけだろう。あと三年か二年か……ひよつとすると、来月には死んでしまうのかもしれない。ネッコは深い悲しみと共に、こんな少女に対して悪魔との生体融合を施した、その魔法使いの神経が空恐ろしくなった。ネッコは思った。祖父の感じた感情も、これと似たようなものであつたのだろうか……？きつと、そうに違いない。

ネッコが何か用かと訊ねようとした時、少女の方から口を開いた。

「……迷子になっているのね」

どきり、とするネッコ。

「……よ、よく分かったね。友達とはぐれて、いつのまにかこんなところ……」

「帰る家も見つからず、辿り着くべき場所も無い」

「……?」

「埋もれるべき土が無ければ、種は開かないわ」

理解できない少女の言葉に、哑然とするネッコ。

「訳わかんないこと言わないでくれ。僕は……」

少女がフードをとると、ネッコは思わずぎよつとした。どこか憂いた顔つきの、その片方の目はまるで灼熱の炎のように真っ赤だったからだ。まさしく、禁術を用いて得たであろう、悪魔の瞳^{マタ}である。

少女は、ローブの襟元から黒髪の三つ編みを引っ張り出し、背中にたらしめた。そしてどことへともなくやっていった視線をネッコに向ける。すくみ上がるネッコ。

「不幸が待ってるわ。巨大なアリジゴクのように、ぽっかりと口をあけてあなたを待ち受けている。逃げててもムダよ。あなたが受ける不幸は、あらゆる物に立ち向かう苦痛か……あるいは、あらゆる物から逃げまどう苦痛か。それらは合わせ鏡のように、ただただ無限に連なっている」

ネッコは少女の言葉の奥に、静かに身に寄せるさざなみのようなものを感じ取った。それは、錯覚かなにかと勘違いしてしまいそうなほど、小さく静かな波。

「ふん。確かに宗教勧誘ならおあつらえの場所だけ……あいにくそういうのは間に合ってい

るもんでね！」

ネッコは毒づき、冗談でも飛ばさなければ、自分がとりこまれてしまいそうな気がした。あの赤い瞳の向こうに覗く、コワク的ですからある闇の深遠に。

少女はネッコに一步近づくと、更にその悪魔の瞳を近づけてくる。思わず震えだそうとする足を必死に堪えると、ネッコは立つのも辛くなっていた。

「かわいいそんなものね」

と、一言。ネッコは思った。かわいいそうなのはそっちじゃないか！ そんな歳で親に貰った目玉をくり貫かれて、人外のものど付け替えられて、おまけに余生はあと何年もなくて、きつと青春なんて味わうこともないんだろう……。

「哀れな哀れな子羊に、イーリアス母神の祝福を」

「君にかわいそうだななんて言われ……んぐっ」

少女はネッコに口づけした。その初めての感触は、昔読んだ詩人のそれとは全く違う、実に生々しいものだった。恐怖に駆られ、少女を突き飛ばす。少女は、二三歩後ろによろけただけで、転びはしなかった。

「ぶっ……はあ……はあ……！！」

口元を拭い、荒々しく肩で息をするネッコ。その時初めて、少女は口の端を歪めてみせた。

「……町はあっちよ。あなたを待つ人々がいるわ」

少女は自分の右側を指差して、そう言った。

「……この……この、きちがい売女！ 僕の唇になんてことすんだよ、バカ！」
ネッコはそういう残し、少女の指差す方向をバカ正直に突っ走っていった。

「お、やっと戻ってきやがった」

息を切れ切れ宿屋に辿り着いたネッコ。三人が食堂に集まっている。

「多数決で、東のルートに決まりましたわ」

ネッコは二人の言葉など聞こえない様子で、自分の部屋へと戻っていく。

「……なんだよ、あいつ」

三人はネッコの奇妙な体験など知る由も無く、ただ訝しげな顔で彼の消えた方向を眺めていた。

メルフィナは、窓から日が当たる机で、一枚の紙を手にし、それをただ黙々と読み続けている。その脇には、白い伝書鳩が、まだかまだかというように首を動かしている。

「……何を読んでいるんだ？」

そのメルフィナの姿に気づき、アッドが声を掛ける。

「お手紙ですわ」

「ふーん、どこからのだい？」

アッドの後ろからやってきたロアが、メルフィナに問う。

「ラヴィーンからです。あまりよくない報告ですわ」

「よくないって？」

「リユネットがラヴィーンを発ったそうです。神聖騎士団を率いて……」

「なんだって？それじゃあ、こんなところでぐずぐずしてるわけにはいかないじゃないか！」

メルフィナの言葉に、ロアが声を大きくして言った。

「……しかし、イーリアスもよく許可を出したものだな」

アッドが神妙な面持ちで口を開いた。

「……魔族からの攻撃もあるかもしれん。そんな時に、易々と神聖騎士団を出してしまってもいいのだろうか？」

「良くはないでしょうけど……許可が下りた理由は、私には理解しかねます」

その傍らで、ロアが叫びながらネッコの寝室のドアを叩いていた。

（魔族からの攻撃……そのうち大きな戦争が起こるかもしれませんね）

……およそ500年前。

魔王モートの軍に、唯一対抗できる種族として筆頭に上がっていたドラゴン族。彼らと魔王モート軍は、長い激戦の中、一進一退を繰り返していた。

魔王軍との交戦する、ドラゴン族の最前線。そこには、アースドラゴン族といった、非常に防御に優れたドラゴン族がシールドを展開していた。

「あまり持ちそうにないか？」

アースドラゴン族を指揮する長、モリスンが、参謀に問う。

「時間はあまりないでしょう。現在、ファイアードラゴンの三個大隊がこちらに向かっております」

「到着すれば、少々は押し返せるはずだが……他はどうなっておる？」

「東地方でウォータードラゴンが戦闘を展開中。後方支援のゴールドドラゴンは、そちらに手が取られており、こちらへの到着は遅れるでしょう」

「回復部隊は期待できんか……」

「モリスン指令！」

モリスンの名を叫びながら、一体のアースドラゴンが近づいてくる。

「カオスドラゴンが援軍を拒否しました。なんでも、カオスドラゴン全部隊で、魔王軍に西から不意打ちをかけるため、援軍は送れないとのことですよ」

「馬鹿な！ そんなことをして、もし失敗すれば、魔王軍が西からなだれ込んできてこちらの布陣が一気に崩れてしまうぞ！」

その言葉を叫びながら、モリスンは翼を広げ、すでに空へと舞っていた。

「パルミラ、パルミラはおるか！」

モリスンが声を荒立て、その名前を叫ぶ。

「モリスン？ 貴様、何故ここに？ 指揮官ともあろう貴様が、前線を離れていいとも思っているのかしら？」

パルミラと呼ばれた赤い目をした黒いドラゴンは、モリスンの姿を見てそう言い放つ。

「ドラゴン族の中でも、すべてにおいて最強と称されるカオスドラゴンが、後先考えずに不意打ちなどという無謀な作戦に出ると聞いたんでな」

「無謀などではない！ 我等カオスドラゴンが集まれば、彼奴等十三使徒にも匹敵する力があると言われている。この不意打ちは必ず成功させる。成功すれば、我等にも巻き返すチャンス

が生まれるのだ！ 我等はこのまま黙ってやられるわけにはいかないんだよ！」

「やめるのだパルミラ！ 失敗すれば、どうなるかわかっているのか！？」

「失敗はない！ モリスン、貴様もさっさと戻って突撃の準備をするのだ！」

そう言いながら、パルミラは翼を広げ、空中へと舞い上がり、手にしていた槍を天へと突き上げる。

「全軍突撃するぞ！」

パルミラの言葉に、カオスドラゴンたちが一斉に吠える。そして、パルミラの後が続いて空へと飛び立っていった。

岩を出発したカオスドラゴンの軍隊は、深い谷のある山岳地帯へと差し掛かっていた。

（魔王軍は東と中央の交戦でかなりの戦力をそがれているはず。不意打ちは今しかないのくらいモリスンだってわかっているはずなんだ。あの山を越えれば……！）

その時、カオスドラゴンの群れの中央で爆発が起こる。

「くっ、散開しろ！」

パルミラの一言で、カオスドラゴンたちは個々に距離を取る。そのカオスドラゴン達に対し、魔物の群れが一斉に攻撃を開始する。

「ま、待ち伏せか！」

パルミラは、向かってくる魔物を薙ぎ払い、地上へと降り立つ。そこでパルミラは、異様な気配を感じ取り、そちらの方へと体を向ける。そこには二本の刀を持った、髭を生やした剣士が一人佇んでいた。

(十三使徒か……！)

パルミラがその男を睨みつけていると、その男はゆっくりと口を開いた。

「我輩の名はラウド。十三使徒の一人、二刀のラウドなり。貴殿が指揮官だな？」

ラウドの問いに、パルミラは黙って睨み返すだけであった。

「カオスドラゴンの強さというのは厄介なものだ。見よ、あれだけの数の我が軍と互角に渡り

合っておる。だが……」

ラウドはそう言いかけて、二本の刀を抜く。

「いくら強いといっても、頭を叩けば陣形は崩れ、士気が低下し、やがて全滅を余儀なくするだろう」

ラウドはパルミラに向けて、ゆっくりと前進する。それを見たパルミラは、槍を両手に持ち、大地を蹴ってラウドへと突進する。そして、ラウドに向けて連続して槍を突き立てた。だが、ラウドは二本の刀ですべて受け流す。パルミラは、たまらずラウドを蹴り飛ばした。

その蹴りで、後ろへ吹っ飛ばすラウド。間髪おかず、パルミラはブレスをラウドの方へと連続して放つ。爆風が止むと同時に、パルミラはもう一度ラウドの方へと突進する。

「流石はカオスドラゴン、我輩をここまで攻めたとは……」

爆風の中に立っていたラウドは静かにそう言った。そして、二本の刀を一気に振り下ろす。

「あああああああああ！」

叫び声と共に、谷底へ落下していく。パルミラ。その背中には、もう翼が存在していなかった。翼を断てばこんなものだ……」

ラウドはパルミラが落下した方へと目をやりながら言った。

「この谷に落ちれば命はないだろう。カオスドラゴンの長、パルミラ。強き貴殿の名は記憶にと留めるとしよう」

指揮系統を失ったカオスドラゴンは、そのまま一気に全滅を喫した。魔王軍はそのままの勢いで、一気にドラゴンの軍勢に流れ込み、そのまま勝利を収めた。

「メルフィナ、おーい、めーるーふいーなー」

ロアがメルフィナを呼ぶ声がする。

「あ、はいはい？」

「何ぼうっとしてるんだよ。出発するぜ」

「あ、ああ、そんな時間ですか。すみません、すぐ行きます」

そう言って、出発の準備をするメルフィナ。四人はようやくナハルの町を出発する。

四人は草原を歩いていった。

ダルフェンディアまではナハルから約十二日間の移動が必要だ。四人は馬車ではなく、徒歩で行くことを選んだため、さらに十日の日数がかかる予定であった。

「……左だ」

「わかつてる、僕に指図するんじゃない」

そう言って、ネツコは炎をモンスターに向かって放った。

アッドとネツコの後方ではロアとメルフィナが二体のモンスターを相手に戦っている。

アッドは前にいる二匹のモンスターを横に凧いで足を止め、距離を取ったところにネツコが魔法を放ち、もうすでに十体以上のモンスターを仕留めていた。

「……きりがないな」

「さっさと切り向けるぞ。このままここで日が暮れるまで戦うのはいやだ」

「賛成」

軽い調子でロアが言う。

「そうですね。早くダルフェンディアにも着きたいですし」

「……了解。メルフィナ、補助魔法を頼む。駆け抜けるぞ」

「わかりました」

「……ロア、いくぞ」

「オーケー」

そのかけ声と共に前方をロアとアッドが駆ける。少しして二人の身体を淡い青の光が覆う。アッドはモンスターを切り裂きながら、ロアは掌に止まらせた魔力でモンスターを殴り倒し駆け抜けていく。

「おらおら、おくれんなよ」

「わかってる、お前は黙って魔物の駆除でもしてろ」

「駆け抜けながらも軽口を交わす二人。」

「ふふ、仲がよろしいですね」

「……違うと思うが」

なんのканの言いながら、四人はあっさりとモンスターの囲みを突破し、しばらく行った草原で一息ついていた。

「魔物を倒しながらではなかなか思うように距離は稼げませんね」

「だけど、戦闘の経験は必要だ」

「めんどくさいけどね」

「……しかし、さっと進めるに越したことはない。次から魔物は無視だ」

「わかった。確かにここの雑魚相手にしていても仕方ない」

「じゃあ、急ごう、急ごう」

そして四人はまた駆けだして行った。

少し先にはモンスターが五体ほど群れていた。

「……」

アツドの無言の一閃がモンスターの三体をなぎ倒し、四人は駆け抜けていった。

女性がいる。

闇の中、白く美しい肌だけが闇に浮かび、得もしれぬ妖艶な印象を醸し出していた。

「なにか用？」

「ネヴィーナ私だ」

「私の知り合いに私って名前の知り合いはいないわ。きちんと名乗ってくれない？」

ケンカでも売る用な口調で男に言葉を返すネヴィーナ。

「モードレットだ」

「あら、副王様ご自身でお越しなんて、どんな用件なの？」

「ネヴィーナ、魔王軍に復帰しろ」

「……」

モードレットの誘いに訝しげに彼を見るネヴィーナ。

「魔王様は復活なされたの？」

「まだだ、しかしもうすぐだ。それまでに、我らは世界を手にして復活なされた魔王様に世界を捧げるのだ」

モードレットは手を強く握り閉め、力の籠もった瞳をネヴィーナに向けた。

「……」

深く考えるようなそぶりを見せ、

「ヴェネルクス・ガルガンディは見つかったの？」

そう訪ねた。

「……彼は先の大戦で魔王様と共に行方不明のままだ」

「そう……ならそのお話、お断りするわ」

「なぜだ？」

モードレットは憤慨したような声で訪ねた。

「言う必要はないわね」

「ネヴィーナ」

「私から貴方に言うことはないわ」

「むむ、また誘いにこよう」

そう言い残し、モードレットはネヴィーナの元を去っていった。

「ヴェネル…」

ネヴィーナの声がむなしく響く。

圧倒的な魔の力を振りまいていたモードレットが去っていった事によって、辺り生き物の音が蘇る。

「私はここから動く気はないわ。そうよねヴェネル」

ネヴィーナはそう呟き、背後の闇に溶け込んでいった。

溶けきった瞬間に一筋の風が吹き抜け、辺りに茂った木々を揺らしていった。

ここはキャメロン城内。ライオネルは窓から空を見ていた。禍々しく赤い月が真つ黒な夜の空に浮かんでいる。

「お呼びですか。ライオネル様」

鉄の兜をかぶり、槍を持った兵士がライオネルの元にやってきた。

「ああ。今夜は城内の警護をいつもの倍にしろ」

ライオネルが月を見たまま言う。

「は？何かありましたか？」

兵士が怪訝な顔で聞く。

「嫌な夜だ……どうも不吉な予感がする。ただの気のせいであってくれればいいが……用心に越したことはない」

「わかりました。城内の兵士に見張りを徹底するように申しつけておきます」

「うむ、頼む」

兵士は敬礼してライオネルの前から立ち去った。ライオネルはまだ窓の外を見たままだった。ライオネルの気のせいか、赤い月を何か黒いものが横切った気がした。

エレインは自分の寢室のベットから起きあがった。どうも今夜は寝付けない。エレインはなにげなく窓の方を見た。レース越しに嫌な赤色をした月が見える。

「あら……何かしら。さつき窓の外に何かいたような……」

エレインはベットから立ち上がって、窓の方に歩いていく。窓枠に手をかけ、窓を開けた。外には何も無い。冷たい風が部屋の中に吹き込んでいった。

「気のせいか……寝付けなくて私も神経質になってるわね……」

エレインは窓を閉め、ため息をつく。その時、エレインの耳に押し殺したように静かな、しかし耳障りな笑い声が聞こえてきた。エレインが驚いて振り返る。部屋の隅に真っ黒い影が立っていた。

ライオネルは静かに廊下を歩いている。たまにメイドとすれ違ふとき、メイドがお辞儀をする。ライオネルは軽く会釈を返すだけで表情は全く変わらない。怒っているようにも見えないので、新人のメイドなどはライオネルを怖がって近づかない。だいたい、ライオネルという男はほとんどいつも無表情だ。嬉しいのか悲しいのかもわからない。エレインも物心ついたときからライオネルと一緒にいるが、笑った顔など一度も見たことがない。ライオネルは体付きも頑強で、おまけに剣の腕もすごい。レオデグランス最強の戦士と呼ばれている。実際、レオデグランスの騎士団にライオネルにかなう戦士はいないだろう。

そんなライオネルの表情が今夜は少し強張っているように見える。気味の悪いほど静かな夜だった。しかし、その静寂はいきなり破られた。激しい音とともにライオネルの前と後ろの窓が粉々に割れて、二匹の翼を持った魔物が廊下に飛び込んできた。息をつく暇もなく、二匹の魔物はライオネルの前と後ろから襲いかかる。

しかし、二匹の魔物はライオネルに触れるか触れないかというところでどざりと倒れた。いつの間にか抜いたのか、ライオネルの手には血にぬれた剣が握られている。目にも止まらないような居合いだった。ライオネルは顔色一つ変えていない。

城内で次々と悲鳴や騒音が聞こえる。城内に魔物が入り込んだようだ。ライオネルの目の前でも次々と魔物が窓から入り込んでくる。

ライオネルは走り出した。廊下にいる魔物達はライオネルに気づいて、醜く牙をむく。しかし、ライオネルは足を止めることなく魔物の横を走り去る。ライオネルの走り去った後に魔物達は次々に倒れていく。

ライオネルの目に剣を持った一人の兵士の姿が見えた。肩から血を流し、荒い息をしている。「ガーナン。無事か」

ライオネルが足を止め、その兵士に言った。

「ええ、これしき……かすり傷です。しかし、すごい数の魔物が城内に入り込んでいます。いきなりの強襲で兵士達は大混乱で、統制もとれません」

「おまえは他の者達を集めてすぐにアヴァロン王の元に向かってくれ。私はエレイン様の所へ

行く」

「わかりました。どうぞライオネル様も気をつけて」

そう言つてガーナンは走り出した。ライオネルもすぐに走り出す。

ライオネルがエレインの部屋の前まで来たとき、エレインの部屋の前を警護していたはずの兵士達は、すでに体をバラバラにされて死んでいた。その兵士達の腕や足を数匹の魔物達がつがつと喰つている。ライオネルの頭の中に最悪の予感がわき上がった。

「邪魔だ！」

冷静なはずのライオネルが叫んだ。瞬く間に魔物達を斬り殺し、そのままの勢いでエレインの部屋の扉を蹴り開け、中に躍り込んだ。

ライオネルが見ると、部屋の中では一人の男とエレインが対峙していた。

「ライオネル！」

エレインがライオネルを見て叫ぶ。

「おやおや、勇敢な騎士様の登場か。もう少しなのに」

男が笑つた。男は白髪のをオールバックにして、たくましい全身を漆黒のマントで包んでいる。そして何より目を引いたのは、その金色の目だった。月の光を受けて不気味に光っている。

「貴様、エレイン様から離れろ」

ライオネルが剣を構えて言つた。その目は男の金色の目を鋭く睨んでいる。

「いけません、ライオネル！ この男はボールスです。あなたといえども十三使徒にはかきません！ すぐにここから逃げなさい！」

エレインが言う。しかし、その体は震えていた。

ライオネルは十三使徒という名を聴いても、少しも表情を変えなかった。視線すら動かない。ずつと剣と構え、男の目を睨んでいる。

「なかなか勇敢な男だな。自分の主人のためになら喜んで死ぬるといふことか」
ボールスが言った。ライオネルの真剣な表情と対照的にこの男は笑っている。

ライオネルが地を蹴った。一瞬にしてボールスとの間合いは詰まり、ライオネルはボールスの頭めがけて剣を振り下ろした。しかし、ボールスの体は霧のように空間に溶け、消えてしまった。

「こっちだ」

ライオネルの後ろからボールスの声が聞こえた。振り返るまもなく、ボールスの右腕がライオネルを吹き飛ばした。ライオネルの体は凄まじい勢いで壁にぶつかり、そのまま動かなくなつた。

「きゃあ！ ライオネル！」

エレインが悲鳴をあげる。そのまま、ライオネルの元に駆け寄ろうとするエレインの腕をボールスが掴んだ。

「諦める。もう死んでる」

ポールスが笑って言った。

「それよりもやけに時間がかかるな。もうそろそろ来てもいい頃だが……おお、来たか」

ポールスがそう言うと、エレインの部屋に一匹の魔物が入ってきた。その手には一振りの剣が握られている。その剣をポールスは魔物から受け取った。

「おお、これか……魔王モートを倒した聖剣エクスカリバーは。さすがに美しい……」

ポールスがエクスカリバーを見て感嘆の声を上げる。

「はなしなさい！ ポールス、あなたは魔王軍の差し金で聖剣を奪いに来たのですか」

ポールスに腕を掴まれたまま、エレインは叫ぶ。

「馬鹿にしてもらっては困る。私は魔王軍再興などに興味はない。私がここに来たのは私の意志だ。私は私の楽しみのためだけに生きている」

「なんのために！」

「私はこういう骨董品に大変興味があつてね。この剣もただの金属の固まりだが、美術品としてはたいしたものだ。それともう一つ……」

ポールスが不気味に笑う。

「勇者募集とかいうおもしろい催し物のことを聞いてね。その賞品に姫君がなっているとか。ぜひその姫君を私の者にしたくなつた。美しい女性にも私は目がない」

「……」

エレインはポールスの不気味な笑みを見て震える。だが……。

「邪悪な魔物が！ 恥を知らなさい！」

片腕を捕まれてまま、エレインがボールスの頬をおもいっきりひっぱっていた。

「気が強いお嬢さんだ。私が血を吸ってしまえばその気の強さもなくなってしまうのは残念だが……」

ボールスがエレインの首元に顔を近づける。

しかし、そのボールスが突然エレインのそばから飛び退いた。片腕から血を流している。

「貴様、まだ生きていたとは。驚いたぞ」

ボールスがライオネルを見て言った。ライオネルがボールスの右腕を切ったのだ。ライオネルは額から血を流し、足下もふらついていたが剣はボールスに向けている。

「だが、おとなしく寝ていた方が身のためだったな。立ってるだけでもつらそうだが、それに……」

ボールスが笑う。エレインの方を見た。

「手癖の悪い姫君だ。とっさに剣を奪うとは……」

ボールスの手には鞘しか残っていない。エレインがエクスカリバーを構える。

「さあ、その剣を返してもらおうか」

ボールスがエレインに無防備に近づく。エレインがボールスに斬りかかった。

「ふん、馴れないことをするものではないですよ、姫君。動きが遅い……」

ボールスはそう言って無造作にエレインの斬撃を避けようとする。その時、エクスカリバー

が白く光り輝いた。辺りが白い光に包まれる。

「ぐわあああっっ」

ポールの悲鳴が部屋に響き渡った。見れば、肩から腰にかけて深く切り下げられている。「な、なんだ今のは……まさか、これが聖剣エクスカリバーと勇者アトロの力なのか……」

ポールスがエレインと距離をとって言った。その表情にはもう余裕がない。エレインはとうと自分でも信じられないというようにポールスを見つめている。

「ふはははははっ、おもしろい。　まだ勇者アトロの血がこんなにも濃く残っていたとはな。今日のところは分が悪い、この辺りで失礼させてもらう」

ポールスはそう言っただけで笑うと、そのまま霧のように消えてしまった。

後日、キャメロン城内は大忙しだった。兵士達の多くは傷ついたが、死者は思ったよりも少なく、またアヴァロン王はじめ国の重臣連中も無事だった、しかし……

お父様へ。故あって、少し旅に出てきます。どうかご心配なさらぬよう。

エレイン

という書き置きとともに、エレインが城内から姿を消してしまったのだ。もちろん、アヴァロン王は大慌て。急いでエレイン姫を捜させたが見つからなかった。

そしてキャメロン郊外。一人の金髪の少女が立派な剣を腰に帯び、旅の用意を持って歩いて

いた。

「ここにいましたか。探しましたぞ」

後ろから男に声をかけられ、ビクツと肩を震わせる少女。ゆっくりと振り向く。

「ライオネル、あなたまだ寝てないといけないじゃない。城に帰ってゆっくりと養生しなさい」

エレインが怒ったように言う。

「そうはいきません。姫の護衛隊長である私がこんな時に寝ていられるはずがありません。さあ、城に帰りましょう」

「いいえ、帰りません。私は決めたのです。この手で魔王モートを倒すと。お父様にはそう言うっておいてください」

「エレイン様。なぜ、いきなりそんな無茶なことを言い出すのです。おまけに国宝の聖剣エクスカリバーまで持ち出して」

「ライオネル、聞いてください。昨日のことで私にはわかりました。勇者アトロの血がこの身に確かに流れていることを。そして、その血は三百年前から少しも薄れていません。お父様は間違っています。魔王モートを倒すのは他の誰でもなく、我々勇者アトロの血を引くものです。他の者達が戦っているときに私だけ城で安全に暮らしているわけにはいきません。勇者の血を引くものが先頭に立って戦ってこそ、この魔王軍との戦いに初めて勝機が見いだせるのです」

「しかし、エレイン様は女性であられる。なにも危険な戦いに身を投じずとも」

「お父様は先の戦いで怪我を負ってしばらく戦場には立てないでしょう。お父様と私の他に勇者アトロの直系のものはいません。なら、私が行くしかありません」

「しかし……」

「いくら止めても私の決意は変わりません。では、ライオネル、お父様よろしく」

そう言つてエレインは歩き出した。しばらく歩いて、後ろを振り返る。ライオネルがエレインの真後ろにいた。

「何の真似です、ライオネル」

エレインが聞く。

「エレイン様がどうしても行くというなら、私もついて行きます」

「いけません。あなたには城でたくさん仕事があるでしょう。お父様の片腕と呼ばれるあなたが、お父様の側にいてもらわないと困ります」

「私の仕事はただ一つ、エレイン様をお守りすることです。それより価値のある仕事は私にはありません。まだエレイン様が幼い頃、私は陛下に誓いました。この命に代えてもエレイン様をお守りすると」

ライオネルがそう言う。テコでも動かないといった表情だ。

「わかりました。勝手になさい」

エレインがため息をついていった。

「ありがとうございます」

ライオネルは表情を変えずに言う。

「さて、目指すは魔王城、モートの首だけです」
エレインとライオネルは歩き出した。

一方そのころ、若き英雄ロットは二人の仲間を連れて、ナハルの町を目指していた。

ロットの鋭い太刀がモンスターの頭をはねる。赤い鮮血が散り、肉塊となったモンスターがその場に崩れさった。しかし、その背後で今にもロットに向けてツメを振り下ろそうとしている別のモンスター。ロットは慌てて剣を構えてなんとかツメを防ぎきるが、劣勢な状況に陥る。不意に、モンスターが力なく地面に倒れ、解放されるロット。見ると、相手のわき腹にはパーティメンバーであるエリックの放った矢が三本刺さっていた。

「ふう……ここにこれほど強力なモンスターがいるとは……魔王復活の噂が、いよいよ当を得たもの感じられるな」

手の甲で額を拭うロット。そのとき、左肩に暖かい光を感じた。同じパーティのクレリック、ルーシイの回復魔法。忽ちロットの傷が癒えていく。

「ありがとうルーシイ。助かったよ」

「い、いえ。とんでもないです！ ロット様」

そういうとルーシイは顔を赤らめ、もじもじした。

（私みたいなのがあのロット様とパーティを組んで一緒に魔王を倒す旅をしているなんて、

はー、まるで夢みたいだわ……)

田舎の農村からやってきたルーシイは、英雄ロットの大ファンだった。数年前、彼女の村に出たトロールをロットが倒したことがあり、その時以来ルーシイの頭からロットの姿は離れない。

「おい、こっちも頼めないか?」

エリックが不服そうに言い放つのをきいて、慌てて飛んでいくルーシイ。

二人のパーティメンバーを眺めながら、ロットは思った。

(あの弓の名手エリックとパーティを組めたのは、ラッキーだったな。ルーシイは少し頼りないけれど、回復魔法は必要不可欠だ。あとは強力な戦士か、魔法使いか……)

魔法使いという言葉に、ネッコの存在が脳裏によぎる。

(……惜しいことをしたな)

今度は、地平線の向こうに見える大きな街に目を移す。

(キヤメロンから出発して十日……ようやくナハルが見えてきたか。あの町でもう一人ぐらいは強力な助っ人がほしいところだが……ん?)

ふと、数十mほど先の道で、一人の男が六匹ものモンスターと渡り合っているのが見えた。

男はかなりの腕の持ち主らしいが、この数ではさすがに分が悪い。考えるまでもなく、ロットは走り出していた。

「エリック、ルーシイ! もう一仕事だ!」

ロットの後を慌てて追いかける二人。しかし、エリックはあまり楽しそうな顔つきではなかった。

（ふん、英雄だかなんだか知らんが、すっかりリーダー気取りだな。気に入らない）

数分後、男の手助けをしてあつという間にモンスターをかたづけけるロット達。

「大丈夫ですか？旅の方」

ロットが訊ねると、男は剣を鞘にしまい、丁寧に辞儀をした。二mはありそうな巨体が深々と頭を垂れる姿は、かえって愛嬌のようなものもあつた。

「かたじけない。私は騎士ガウエインと申します」

「同じく騎士、ロット・ステイルバンです」

ロットの名を聞くや否や、ガウエインの顔に明らかに喜々のとした表情が宿る。

「おお、英雄騎士ロットとは、あなたでしたか！」

豪快に手をうつつガウエイン。小手と小手がぶつかり合う音が響く。

「魔王を倒す旅に出たものなかなか相応の実力をもった戦士が見つからず、仕方なく今まで一人でやっておりましたが……いや、あなたの下でなら思う様戦えそうだ。ロット殿、どうかこのガウエインをそちらに加えてはもらえんでしょうか？」

「それは願っても無い事です。あなたのような腕の立つ仲間が出来るなら、私たちも心強い」
そう言って、ロットが右手を差し出す。

が、ガウエインはそれに応えない。

「……おっと。早まらんことです、ロット殿」

そう言うと、ガウエインは自らの腰に携えた両手剣を抜き、正面に構える。

「し、失礼じゃありませんか!？」

いきり立つルーシー。ロットは手をまっすぐに伸ばしてそれを制す。

「無礼は承知の上。最近の騎士はパフォーマンズばかり優れて、名前ほどの腕をもたない輩が多いもので……」

鞘からゆっくりと剣を引き抜くロット。

「同感です」

お互い、正面に剣を構えながら、じりじりと距離を詰める。張り詰めた緊張感。隣で見ているルーシーとエリックが思わず息を飲む。風一つ吹かない大地に強い日差しが照りつける。二人の剣が鋭く太陽の光を反射させた。

「そりゃあ!」

仕掛けたのはガウエイン。刃の切っ先がロットの頬をかすめる。これほど巨大な両手剣をあまりに軽々と振り回すのでロットは驚いた。

（力の打ち合いでは勝てないと思ったが……これじゃあ、動きの面でもそれほど分があるわけじゃないな……!）

攻勢のチャンスを与えまいとして、どんどん打ち込むガウエイン。ロットが強烈な一撃を紙

一重でかわすたびに、ルーシイが小さな悲鳴をあげる。

「ああ、ロット様……頑張つて……ひいっ！」

大きく振り下ろされた縦一文字を、なんとか剣で防ぎきるロット。しかし、その重さに剣は痛々しくそり曲がっていた。軋む金属音。

「さあさあ、どうしましたロット殿！」

威圧感溢れるガウエインの声。しかし、ロットの表情は嬉しそだった。

（このガウエインという騎士……本物だ！ どうしても私はこの騎士がほしい……いや、この旅にはどうしても必要だ！）

ロットが剣を横にいなすが、ガウエインは大してよろめきもせず、すかさず次の一撃を加える。それをしゃがんで、紙一重で避けるロット。

「そりゃあ！」

ロットが掛け声と共に振り上げた一閃を、剣で防ぐガウエインだが……そのガウエインの顔面に、抜群のタイミングで蹴りを叩き込むロット。鉄のブーツで蹴られた額は切れ、激しく血が噴出す。

「ぐぬ……！！」

予想外の攻撃に大きくよろめくガウエイン。次に、ロットが剣の腹でガウエインの胸を打った。衝撃が内臓に響き、激痛に襲われる。ガウエインの不屈の闘志が、起死回生の一撃を放たせるが、いままでの圧力には程遠い攻撃。ロットはそれを軽くないすと、ガウエインの肩口に

向けて大きく振りかぶった。

「ま……まいった！」

ピタリととまるロットの太刀。周りで見ていた二人は思わず安堵の溜息をもらした。いそいそとガウエインの元へ駆け寄り、回復魔法を唱えるルーシィ。

今度は、ガウエインの方が右手を差し出した。ロットはそれを強く握り返す。

「何処へでもついていきましよう、英雄騎士どの」

かくしてロットは後れこそとったものの、なんとか頼れる仲間を見つけだし、魔王の元へと旅路をすすめていた。

——砂漠の王国ペルセン。

レオデグランス王位継承を狙う王子ヤクシャの前に、総勢一万にもなるペルセン兵が隊列を組んでいた。そのうちの誰一人として微動だにしないその風景は、まるで手の込んだミニチュアのように規則正しく、美しい。

「時は来た！」

四人の屈強な男が支える台座に立ち、王子ヤクシャは一万名の兵隊に叫んだ。

「今こそ魔王を討ち取り、レオデグランスとの悠久の戦いに決着をつけるのだ！ 相手が魔物だからと言って恐れることは無い。所詮は数百年前に滅んだ負け犬どもの生き残りにすぎないのだ。知恵をもつ人間の相手ではないということは、すでに歴史によって証明されているのだ。

から！」

ヤクシヤは腰につけた曲刀を抜き、高く掲げた。王家に伝わる伝説の曲刀、ファルシオンである。太陽の光が刃の切っ先に跳ね返ると、そこいらの曲刀とはかけ離れた神々しい威光を放ち、兵士達の闘志を否が応にもかき立てる。

「目指すは魔王城一点のみ！　魔王とその腹心を討ち取り、我がペルセン王国における世界統一の第一歩を踏み出さん。さあものども、行くぞ！　全てはアル・ハーリックの神のために！」

広大な砂漠を包み込むような、男たちの雄叫び。かくして、ペルセン王国史上最大の進軍が始まった。

——魔法王国サンダルクの極北、知恵の塔。

石張りの部屋を不気味に支配する巨大な水晶。どういう原理か、その中には先ほどのペルセンの兵隊たちが魔界に向けて悠然と進軍するビジョンが映し出されている。ポツンと佇む一人の老人が、それをぼんやりと眺めていた。ネツコの祖父、魔法使いルドヴィヒである。

「始まったか……」

ルドヴィヒはポツリと呟いた。ゼム・ロックとの死闘のすえ潰された片目には眼帯が宛がわれており、その役目を終えているが、しかし水晶を見据えるもう片方の眼は、その碧色の輝きを失ってはいない。

かすかな音をたて、ゆっくりと開かれるルドヴィヒの背後のドア。

「……リジョか」

振り向きもせずルドヴィヒは呟いた。リジョと呼ばれた男は部屋には入らず、ドアの縁にもたれかかって水晶に目をやった。

「おっと、ペルセンの進軍が始まったか。こりや、穏やかじゃないなあ……」

水晶に映し出されているペルセンの軍勢を見て、リジョは言った。

「なにをしに来た？」

「やれやれ……それがせっかく尋ねて来た息子に向かって放つ言葉かねえ」

リジョは首をかしげた。ルドヴィヒはまだ背を向けたまま、やはり水晶に目をやっている。

リジョは気にせず言葉を続けた。

「……人間達にとって最重要の防衛線、ノーススターナイツはすでに魔物達によって破られています。レオデグランスでは吸血鬼ボールスがキャメロンを襲い、そしていま、ペルセン王国は一万の兵を駆りだして進軍を始めた……魔界と人間界の大戦争、数百年前の悲劇の再来。世界はやはりこうなる運命ですか？」

「氷河期が来ただけのことだ。人間達にとってのな」

事も無げに言い放つルドヴィヒ。

「氷河期ねえ……しかし、冬眠にはまだ早いのではないですか？世界がそうなりつつあるという事はまた、紛れも無くあなたの力が必要な時が迫っているという事。もしこの国が使徒のように強力な力をもつ魔物に襲われたとして、元老院の連中にはなにもできませんよ」

「……私も歳だ。殺し合いにはほとほと疲れた。それに私のような骨董品が出てこなくとも、君の息子がいるだろうに」

「ネッコは……あいつはまだまだですよ。まだ遊戯の域は出ていません」

リジヨの、父親としての辛辣な意見。

「そうかな」

「そう言うのとルドヴィヒは近くのテーブルにまで移動し、備え付けてある椅子にゆっくりと腰掛けた。リジヨもテーブルを挟んで正面の椅子に腰を下ろす。

「……そう卑下することもあるまい。君の自慢の息子じゃなかったのかね？」

「いまのネッコでは、ゼムの娘にすら勝てません」

ルドヴィヒは宿敵ゼムの名前を聞き、初めてリジヨの顔を見た。

「ゼムの娘？まだ幾許の歳でもなからう」

「ええ。十五、六だったか……しかし、ゼムによって禁術を施されております」

「なんと……酷いものだ……」

「そう言うのと、額を押しえてほんの少しいな垂れるルドヴィヒ。

若ければ若いほど禁術というものはその効果を絶大に発揮させるが、また体を蝕む勢いもガン細胞のように凄まじい。ゼムはきつと娘を強化しつづけ、その子の死の直前にルドヴィヒに挑ませるつもりなのであろう。それを理解したルドヴィヒの顔はまた一段と暗くなった。自分の命が危ぶまれるというより、無残な現実と狂った魔法使いに対する憤りに。

「いづれまた、ゼムはあなたに挑戦してくるでしょう。しかし、そのとき出てくるのはやつの娘かもしれない。そう遠く無い未来の話です」

「神はつくづく残酷だ。この歳になって、私の半分も生きていない娘を殺めろというのか」

「……殺める、か。しかし、そう一筋縄にもいきませんよ……娘は悪魔の瞳をもっていますから」

リジヨの言葉を聞いて、ルドヴィヒの顔つきが変わる。

「……悪魔の瞳？」

アッドが不思議そうにネッコに聞き返す。

ダルフェンディアまでの道のりも終盤、四人は肩を並べて果てしなく広がる草原を歩いていた。

「ああ。悪魔の瞳をもった女の子が、ナハルの国立自然公園にいたんだ」

「……それは、そこいらの少女がたまたま持っているようなものなのか？」

「まさか。作為的に埋め込まれたものだよ。いわゆる禁術の一つで、デーモンの肉体を使った生体融合さ」

ネッコの言葉に驚くロア。

「生体融合って……そんな術があんのか」

「闇の界限では結構有名な術だよ。ただ、リスクがあまりに高いので、なかなか誰も手を出さうとはしない。特に瞳は難しく、よっぽど腕の立つ魔法使いでないと自殺行為に等しいんだ」

（そう。融合術の創始者、ゼムのような男でなきゃ……）

ゼムという言葉が脳裏に浮かび、難しい顔をするネッコ。

（まさかナハルにいた少女の瞳もゼムが……？いや、まさかな）

「生体融合ねえ。人間はおかしなことを次から次に思いつくよな」

（そーいやナハルでデーモンの気を感じる人間を見たっけか。あいつもひよつとしてその生体融合とやらをやっていたのか……？なるほど、道理で馬鹿げた実力の持ち主だったわけだ）

一人でうんうんと頷き、納得するロア。

「……で、その悪魔の瞳というのはどんな力を持っているんだ？」

アッドの言葉に、首をかしげるネッコ。

「ん……それは知らん。魔力の強化とか、人間の目よりもよく見えるとか、そんなじゃないの？」

「なんだ。リスクをかける割には大した能力じゃないんだな」

「たかがデーモンの瞳にそれほどの力があるとは思えないよ」

ネッコとロアの会話を聞いて、どこか不安そうなメルフィナ。

「しかし……悪魔と人間との生体融合は、突然変異的な力を生み出すきっかけになると、なに

かの本で読んだことがあります。得られる力は、元のデーモンなんかとは比べ物にならない場合も……」

「問題はその子が俺たちの敵かどうかさ。どうだったんだ？ ネットコ」

ロアの言葉にネットコは戸惑う。

「敵じゃないだろうけど……ヘンな奴だったことは確かだな。なんていうか……」

なかなか言葉を紡がないネットコに、三人の視線が集まる。居心地が悪くなったのか、首を二、三度横に振る。

「……お前達。道すがら、思わず目を見張るような美人とすれ違ったことはあるか？」

「な、なんだその例えは？」

ロアの突っ込みをあえてスルーするネットコ。

「それがどれほど衝撃的であっても、それこそ遺伝子レベルでその女性に惚れようとも、自分とは何の接点も見当たらない。もはや、一生会う事ができないと決定的に予期させられる理不尽さ」

「要するに、その女の子が可愛かったのね」

「違うぞ。問題は、もはや一生会えないってところだ。きっとあの日のことは僕の一生を通じて心のしこりとして残るだろう」

「はっはっは！ 寿命の短い人間特有の詩心ってやつかあ？ ネットコ、お前には似合わねえよ」

「……同感だな」

「ふ、ふん！ お前たち魔物には人間の心の機微が分からないのさ。なあ、メルフィナ」

「……え？ええ」

うろたえのような違和感をメルフィナの中に見て、不思議に思ったネッコだったが、あえて問いただすほどでもないとすぐに忘れてしまった。

（人間の心……か）

ふいに、ロアは胸元の首飾りを握り締めた。

（人生長いというろい忘れっぽくなるんだよな……）

「……ダルフェンディアだ」

アッドの言葉に、三人は歓喜に満ちた目で前を見上げた。草原に押し広げたように広がる町並み。ナハルをたつてちょうど二十日目の到着だった。